

第6回 銀華文学賞発表

銀華文学賞

銀華文学賞もおかげさまで六回を重ねることができました。今回もまた日本全国および海外から、五二六篇の作品が寄せられました。昨年の四四九篇をはるかに超える御応募をいただきましたことを、心から御礼申し上げます。

多数の応募作の中から、選考委員／大高雅博・八覚正大・小沢美智恵・小浜清志・五十嵐勉による厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。優秀な作品、力作、佳作も多く、たいへん充実した選考となりました。

また本年も故河林満を偲んで、御遺族の御厚意により河林満賞を選出させていただきました。

なお、誌面の都合により、奨励賞などの作品は三四号以降に順次掲載させていただく予定です。御期待ください。第六回銀華文学賞授賞式・祝賀会および懇親会は、二〇一〇年一月三十一日（日曜日）午後二時より東京の大田区民プラザにて「文芸思潮」エッセイ賞・現代詩賞授賞式などといっしょに行なう予定です。どなたでも御参加可能ですので、どうぞお誘いの上御来場ください。

第七回銀華文学賞も昨年とほぼ同じ要領で行ないます。皆様の御応募を心からお待ちしております。

当選

「線路は続く」

榎木啓子（北海道札幌市）

「光のケーソン」

藤原恵一（埼玉県さいたま市）

河林満賞

「白い哀しみ」

前岡光明（東京都町田市）

優秀賞

「幻臭」

室町 眞（東京都杉並区）

「道標」

井上梨白（神奈川県横浜市）

「ワンス イン マイ ライフ」

二宮英郷（東京都渋谷区）

「ガラス」

森崎房枝（東京都杉並区）

奨励賞

「名残りの月」

田島朝美（東京都日野市）

「歳月」

丸山 史（大阪府八尾市）

「緑のアリ」

吉野光久（神奈川県横浜市）

「カナカナリンリンリン」

鈴木英夫（東京都小金井市）

「ぬくい北風」

田宮佳代子（北海道上川郡）

佳作

「源流」

小西九嶺（奈良県奈良市）

「沖見茶屋」

佃 陽子（神奈川県横浜市）

「轟音」

篠宮安紀子（東京都練馬区）

「再会」

大重晴よし（静岡県浜松市）

「星降る里にて」

犬丸らん（東京都練馬区）

「予告」

相川柊子（千葉県千葉市）

「戻り道」

足立 剛（兵庫県水上郡）

「グランド・オダリスク」

松丘光一郎（東京都江東区）

「君は終幕を前にして佇むか」

土田ひろし（静岡県沼津市）



力のある言葉

八覚正大



力のある言葉とは何か。

最近、そればかり考えている。書き言葉に物理的重さはない。それは見られることによって初めて存在する。たとえ見られても読まれなければ紙に印字されたインクの染みに過ぎない。しかし、それが一旦読む側の脳に入ると人を感動させ、また落ち込んだ気持ちを腑活させ、時に身体さえも動かすような——そんな言葉とは何なのだろう。

かつて、文学（書き言葉）に人生を賭けた人々がいた。文学を至上のものと憧れ言葉の力を信じ、人間の真実・秘密を掘り出し書き出したいと実生活さえ犠牲にした者たち……しかし冷静に考えると、それらの行為さえ実は脳の活動という生理的な次元で捉えられることが分かってくる。心理学・精神医学・大脳生理学が進み、脳神経の機能・生理が解明されつつある昨今、人間の願望・欲望さえも、あらゆるレベルまでは科学的に解明されるようになってきた。

さらにパソコン・インターネットの進歩と普及により、あらゆる情報が膨大に増えている……そんな中で文学（書き言葉）の意味とは何なのだろうか……その復権を盲目的

白に近い父親の気持ちの投影は実は個体としての宿命を負った人間が、寄り添いという本能をどこまで伸ばせるかという一つの実験でもあるのだ。やがて個体としての父親が老い、息子は理解の枠から剥がれていくかもしれない。しかし「いま・ここ」においては極上の時間がある。《今ここに、ケーンとこうして過ごす時間、息を継いでいるわずかな空間。……ここには、妻の千冬もいない。……ケーンと二人だけいる高揚感、あれらの時間が持っていたものとはまるで性質が違う。自分の愛する子供といっしょにいる、というだけの幸福感とも違う。それ以外の、何かもつと大きくて豊かなものだ》と。大江健三郎と光君を連想しても構うまい。また出だしの古書店での情景の書き過ぎも指摘はできよう。さらに名前やタイトルの付け方にもっと推敲は可能だ。しかしそんなものは直せばいいのだ。この小説には、おそらく実体験を元にした、人間の関係を柔らかに深くさぐる「言葉の力」がたしかにある。

もう一つの当選作、「線路は続く」も秀作である。嫌なというか、その感覚を理解しがたい夫と何十年も連れ添った妻の思いがよく描かれている。世界は狭いのだが、ラスト、脳出血で倒れた夫を、見捨てないところがいい。《これが自分の役回りなのだ。世話をするものとされる者。どこまでいっても自分はされるほうにはまわれないのだ》という自己認識。そしてやがてくる「その先」を暗示させて

に叫ぶのでもなく、至上なものと祭り上げそこにすがり安住するのでもなく……それでも「言葉」という人類が生み出した不可思議な「発明品」を、再びよりよく機能させ得たらと思う……。

さて、さすがに応募総数が五〇〇を超える、どうにか「言葉力」に出会い始めることができるようになった気がする。数はやはり質を高めるのだろうか。

当選作の「光のケーン」（藤原恵二）は、一言でいえば障害児を息子にもつてしまった父親の日常に寄り添った小説である。文が柔らかいというか、優しいというか、暖かいというか、なめらかというか……読みやすいのだ。それなりに裕福な家庭の息子ケーン（健一郎一八歳）は特別支援学校の高等部に通っている。主人公の父親は土曜日の午後、彼を養育施設へ車で送り迎えをする。その運転途中での「内的対象としての息子」との対話。いままで保護していた息子は年齢と共に発達（変化）していく。それを理解しようとする父親はバックミラーに映る息子の顔を読もうとする。《ケーン、ケーン、何を言っているんだ、パパが知らないとも思ってたか？ パパはな、ケーンが考えてることなんか、ちゃんとわかっているんだ。ケーンがほんとうはどんな子か、ちゃんとわかっているんだ。そうなんだ、パパは、わかってたんだ。じゃ、僕の今一番つらい、ほんとうのほんとうの悩みって、なんだか、わかる？》……この独

終わる。一段落させたうまい止め方ではある。ただ、その先を幾分なりとも（経験的に知ってしまった読者）には、動かされるような「言葉の力」までにはならなかった。

「ぬくい北風」（田宮佳代子）——十八歳で十勝へ嫁いだ女性の一代記。生き生きとした会話文、また老婆の視点の

河林満賞の創設について

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品は銀華文学賞に応募される小説作品を対象にし、銀華文学賞選考委員によって銀華文学賞選考会において同時に選考され、御遺族の承認によって決定されます。

受賞者には賞状、賞品、記念品、賞金五万円が銀華文学賞授賞式で授与されます。

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」

文芸思潮

暖かき。ここには人間の生命力のなんというか、大らかな
 ホールディング作用(包み込み)がある。最後に、老婆が
 「母ちゃん母ちゃん眠いよ母ちゃん。わっしや、めんこい
 赤ん坊よ」と言って終わる。生と死の大らかな円環を見る
 ようである。紙面の関係でこのくらいしか書けないが、こ
 の小説も「言葉の力」を十分に感じさせる作品である。評
 者としては、「光のケーン」に次いでこの作品に感動した。
 以下印象に残る作品をコメントしたい。

「カナカナリンリンリン」(鈴木英夫)——亡くなった妻
 の位牌をリュックに入れて滝をめぐる男の話である。なぜ
 滝なのかという点が分からなかったが、主人公の内面で成
 仏していない妻への弔いの気持ち、しつとりと描けてい
 る秀作である。

「幻臭」(室町眞)——加齢臭への思いが、主人公の妻の
 側からよく描けている。自分の臭いへの認識をもつラスト
 がなかなかいい。

「星降る里にて」(犬丸らん)——父が戦死し、若い母親
 は他家へ嫁いで行く。主人公を育ててくれた祖母との関わ
 り。文体がみずみずしい。

「白い哀しみ」(前岡光明)——白血病になった息子の失踪。
 それを捜しに久しぶりに新宿を訪れた話。切実感があった
 が、どこか新宿の再紹介のような感が。

「戻り道」(足立剛)——少年の牛との関わりの話。描写
 だしはなかなか読ませた。しかし昔の恋人の女医へのコン
 プレックス? は話をぶれさせた。

「老舗奉公」(安田榮一郎)——江戸時代の商人の物語。
 時代物として分かりやすい。ただ、なぜ江戸時代という設
 定を必要とするのか、その作者の意図を伝えて欲しい。

「緑のアリ」(吉野光久)——オーストラリア駐在の特派
 員の、旅行にきた日本女性との情事。文が知性と情感をも
 っている。ただ回想からさらに何かを立ち上げてほしい気
 がした。

「湘南でのちょっとした出来事」(大崎長者丸)——久し
 ぶりに会社を休んだ男性。不思議の国のアリス的展開?
 しかし後半失速。

「名残の月」(田島朝美)——母を看取り家族を育てき
 った女性の話。苦勞がよく描かれてはいる。

「沖見茶屋」(佃陽子)——戦時中、シンガポールで亡く
 なった愛する父の思い出。

「ガラス」(森崎房枝)——入院して思い出した原爆の記憶。
 重い内容ではある。

「グランド・オダリスク」(松丘光一郎)——五十歳にな
 るうとする男の中学時代の憧れの美女との再会? 男性の
 読者としては興味をそそられたが、なにか現在での展開が
 ほしい気がした。

今回は、さらに総数七〇〇くらいの応募になって、言葉

がみずみずしい。養子に出された子であったことに主人公
 は気付き驚く。が養父の元へやはり帰っていく。生活力の
 ようなもの根っこに触れている気はするが、「言葉の力」
 になるまでには、もう少し構成などに工夫がほしかった。

「道標」(井上梨白)——アル中患者の実体験的な更生の話。
 この世界のことを素直に、なかなかよく描けている。
 「轟音」(篠宮安紀子)——清書のアルバイトを始めた女
 性が、社長の戦後の引き上げの凄惨な話を聴いてしまう。
 なかなか大変な時代のことだが、そこからさらに心は癒さ
 れるのか——というテーマの展開を見たかった。

「君は終幕を前にして佇むか」(土田ひろし)——ガンに
 なり自殺しようと思った男性が、負債を抱え自殺をしよう
 とした男性と出会い、その偶然の出会いと関わりから互い
 に思いとどまってやり直そうとしていく話。頻発する現代
 の自殺の問題とも絡まって、テーマが読ませる。

「源流」(小西九嶺)——平家の落人の歴史をもつ村。自
 分の出自が分かっていく青年。文が分かりやすく知的。

「ワンス イン マイ ライフ」(二宮英郷)——常連の
 作者。筆力はかなりのもの。また性的なエネルギーを生命
 力の謳歌として用いる手法は、この作者ならではの。

「再会」(大重晴よし)——別れた妻が乳がん。その妻
 と和解する夫。娘がなかなかよく描けている。

「君は金比羅を見たか」(神月ふみや)——長崎被爆の出
 の力をさらに広げてくれる作品が出てくるのを期待してし
 まう。選評者を含めて、読者の脳は貪欲なのだ。

作品を選ぶことの怖さ

小浜清志



新しい裁判制度が今年から始まり、
 人が人を裁くことの怖さと、難しさ
 などが報道されているが、作品を選
 ぶという行為もまったく同じであると実感している。ある
 程度の実力があればほとんど横一線というのが作品選考の
 宿命ではなからうか。

私の編集担当をしていた方が、あるとき、文学賞の最終
 候補を選ぶときの苦悩をしみじみと語ってくれたことがあ
 った。最後の最後までどっちにしようかと悩み抜き、いつ
 そのこと鉛筆を転がして決めようかと本気で考えたことも
 あり、あれは神をも恐れぬ行為だったと述懐していた。や
 はり人が人を選ぶというのは非情であり、傲慢なのである
 うが、どこかで基準を設けなければならないという現実
 はぜひ理解していただきたい。

当選作になった「線路は続く」であるが夫婦の息詰まる雰囲気巧みな筆力で描かれている。いい作品にはつきものであるが、どうしてもないものねだりをしたくなる。この作品でいえば、作中にでてくる鎌倉などの風景を配置してくれたらもっと厚みが出たのではと、欲をつけ加えさせてもらう。

さて、もう一方の当選作である「光のケーン」は特異な作品で、私としては前半の古本屋のエピソードがなければもろ手をあげて歓迎したい作品である。ケーンの日常と作者だけにしほりこめばもっと共感できたと思う。つまりは構成的に古本屋とケーンがうまく結びついているように見えないのである。これも前作同様なものねだりの、いい作品であるからである。それは優秀作の「ガラス」にも言えることで、あの原爆をなぜ回想にもってきたのかと悔やまれる。現代と過去を行き来して作品の奥行きを広げようとしているが、あまり効果がでていとは思えない。

河林満賞の「白い哀しみ」の作者は何度か目を通しているが、今回の作品は過去の作品と比べると迷いがふつ切れたようにいきいきと展開している。私は当選作でもいいのではと思っていた。

私が最も高い点をつけたのは「緑のアリ」である。文句のない筆力に圧倒されたが他の選者の賛同を得られず奨励賞にとどまってしまったことが残念である。

西荻窪の古本屋からはじまり、なんだろうと読んでいくと、知的障害を持つ息子との話になる。選考会で、色々な欠点弱点の指摘があった。しかし、おそらく、それらはいいた問題ではない。筋も結末も、殆ど関係のない小説があり、これがそれなのだ。僕は読みながら、奇をてらった変わった結末にならないように祈ったほどののだ。小説を終わらすためにだけ、結末がある。とにかく、不思議な小説である。当選作「線路は続く」(楡木啓子)は、総合点では最高得点であったが、少し、暗くはないかというのが僕の感想だった。選評を書く今、考えると、暴力ではないにしろDVの加害者である夫と、耐える妻。単に妻は自分名義の通帳をもっておくべきというような教訓なのだろうか、離婚はできなかったが、結末は小説的な解決策であるようだ。しかし、本当の暴力をふるう夫にたいしても最後に「ありがとう」といわれるとそれで終わりになるのだろうか、という思いは残る。

優秀作「道標」(井上梨白)は、読んだときから、優秀作以上という感じがあった。アルコール中毒の療養所の更正の話であるが、説明的すぎる、また、前に同じ題材で、他の作家が書いているもので、もっと凄惨な内容のものを読んだことがあるという指摘があった。僕は説明的な部分がそれほど気にならず、登場人物達もそれぞれ、うまく描かれていると考えたが、評価が割れたのは残念だった。

今回は選にもれたが「新宿の静かな夜」のもつ魅力に次回を期待している。しっかりとした作品姿勢のある方で、テーマさえしっかりとして整えば傑作が書けるであろう。

全体的に言えることであるが、もう少し自分の作品を大事にするためにも是非推敲をお願いしたい。ちなみに私は最低五〇回位の見直しをしないと世に出す自信がもてない。作品は一度手元を離れてしまえばもう戻らない。であるなら、この化粧でいいのかこの服でいいのかと悩み手直しをするのは当然のことだと思う。

題材にふさわしい文体、書き方

大高雅博



下読みから選考をおこなっていると、今回は上下の差が大きかったような感じがある。ただ、これも今回の作品を比較したことによるもので、次期作品では逆転するかもしれない。小説とは本来そういうものなので是非、精進をお願いしたい。

当選作「光のケーン」(藤原恵二)は不思議な作品である。

優秀作「ガラス」(森崎房枝)は原爆の話であるが、現在の病院に入院している主人公と、同室の意地悪な患者というような設定ではじまる。そこから、原爆の話になるわけだが、ストレートな原爆の話よりも効果的である感じがする。この作者にはもっと良い作品があったという他の選者の意見もあり、優秀賞となった。

優秀作「幻臭」(室町眞)は、臭いと、老いをからめたもので、着想が良かった。ただ、僕には結末が、その構想ではなく、文章の問題だと思うが、ちょっと弱い感じがした。

河林満賞を受賞した「白い哀しみ」(前岡光明)は、完治が難しい病気にかかった息子が家出をし、彼を捜しに昔住んでいた新宿を訪れるという作品で、題材のこともあり、緊張感があった。骨髄移植が広まらない等のかなり深刻な問題を背景にしながら、後味がよい作品に仕上がっている。優秀作「ワンス イン マイ ライフ」(二宮英郷)はいつものように彼らしい力のある作品である。今回は、姪の学費をどう工面するか、又、女優志望の高校生に生活のために鍼灸のような学校へいくことを進めるなど、今までにはないひねりのようなものがあり、興味深い。

以上のように見ていくと、かなりの力作が集まってきたことが分かる。他にも何作か興味深い作品があった。

奨励賞「歳月」(丸山史)は別れた夫との再会の話だが、緊張感のある文章で、面白く読んだ。

再受賞の輝き

五十嵐 勉



奨励賞の「名残りの月」(田島朝美)は、何作か読んだ彼女の作品のなかでは、一番優れていると思う。ツバメの巣立ちと、家族が離れていくのを対比させて書かれている。おそらくこの題材で書けるのはこの一作だけだと思う。ただ、文体というか文章というか、最初の部分でセンテンスの長い文があり、それほど効果的とは思えなかったが、それで貫く方法もあった。後半の短いセンテンスのほうが、テンポも良く読みやすいのであるが、全体に文章は練った方が良い感じがする。それはともかく、ある題材にはそれにふさわしい文体、書き方がある。というか、それしか書けないやり方があると思う。一度きりの題材ということが、読み手に伝わるものなのだ。考えてみれば、そういう作品が今回は多かったようだ。まず、そういう題材を見つけることが必要なのだ。それはおそらく比較的身近にあるものなのだ。

何度も奨励賞以上の作品を書いている人もおられるが、二度三度となると、それなりの成長がないと評価は厳しくなる。騙ることなく何が足りないかを考えていただきたい。次作を期待している。

せなかつたものの、手を入れてもらって、その世界を再認識した。文章の質はいい。技量をさらに磨き、この作品で書き足りないところを次の作品でさらに書いていってほしい。

河林満賞となった「白い哀しみ」(前岡光明)は、白血病になった息子が新宿へ家出するあとを追って自らの青春時代を振り返りつつ、街を捜し歩く父親の物語で、残された短い命に触れ合う親子の感情がよく書けていて、河林賞にふさわしかった。

今回はこうした過去に賞を得た書き手の奮起が目立ち、榎本啓子氏やこの前岡光明氏をはじめ「幻臭」の室町眞氏、「ワンス イン マイ ライフ」の二宮英郷氏、「ガラス」の森崎房枝氏、また「歳月」の丸山史氏、「名残りの月」の田島朝美氏、「カナカナリンリンリン」の鈴木英夫氏は、おなじみの顔である。再受賞は、当然ながら前よりもよい作品が要求される。受賞した作品以上のものを書くのは、むずかしい。一度、二度、あるいは三度と、受賞作より落ちる作品を書いても、それに屈せず持続してさらに自分自身に挑戦し乗り越える不屈の努力と前向きな姿勢があつてはじめて、前以上の作品に結実する。その意味では、再度受賞したこれらの書き手には、一つのハードルを乗り越えた大きな成果として心から拍手を送りたい。

選評

「道標」(井上梨白)は、アルコール依存症患者の病院治

第六回の銀華文学賞は、突出したものはなく、代わりに応募を重ねた書き手の活躍が目立った。

当選作「線路は続く」の榎本啓子氏は、これまで優秀賞・奨励賞にもなっている安定した技量の持ち主だが、今回は一段と作品の出来がよく、ほとんどの選考委員が高点をつけた。世間知らずの大学教授の夫を最後まで面倒を見ようという覚悟に至るストーリーの運びは流れもよく書けていて、技量の向上がはつきり感じられる。タイトルがもう一つの印象だが、予備選考トップで上ってきた経過は肯定でき、まとものよさは抜きん出ていた。これをきつかけにさらに優れた作品を期待したい。

同じく当選作、藤原恵一氏の「光のケーン」は、知能に障害のある我が子を学校に送迎する父親の世界を描いたものである。私としては父親からの視点だけしかないのは不満で、少しでも母親の立場を入れてほしかったのと、最初の本屋の部分が長すぎるなど細かい点においても、表現にしっかり手が届いていない恨みがあつたので、当初は推

療の回復と社会復帰の状況をレポート風に書いた作品だが、素材としては最も興味深い内容で、それだけでも価値があると思つた。状況記録以上のものがほしいという他の選考委員からの注文もあつたが、私としては、この世界を知らない人にはこれだけでも読む価値があると判断した。変わった材料、新鮮な素材は、小説の大きな魅力の一つである。無条件に引き込まれる世界は、物語の源泉を備えている。

この「道標」は登場人物一人一人がおもしろく、現実の体験の重さを備えていた。

特異な体験としては、森崎房枝氏の「ガラス」は、放射能汚染されたガラスの破片の話だが、原爆の爆発力によって割れたガラス破片のすさまじさがわかるとともに、汚染ガラスの力は、流血をさせない不思議な作用があり、それがいっそう不気味さを誘って、原爆の奇妙な側面を垣間見させてくれた。原爆のガラス破片についての小説は初めて読んだが、こうした知られないことは、丹念に拾っていけばまだまだありそうである。後世に残すべき記録の発掘のためにも、この銀華文学賞にさらに期待したい。

銀華文学賞は、四五歳以上という枠を設けてあり、テーマも普通からすると熟年以上の問題と限られてくるのではないか、という懸念もある。枠を取ってしまつたらどうかという提案も寄せられている。しかし、現在の所、大手出版社の文芸誌などが、若手中心の新人賞に選考も偏ってい

るという批判に立っての賞なので、この立場を貫きたい。テーマが老年の問題とか、限られてくるのではないかという批判については、熟年・老年でなければ見えてこない人生の問題は、もつと多様で、もつと領域が広いものだと思う。その点では、今回の作品のほとんどは、常識的な領域にとどまっていたと振り返る。もつと積極的な姿勢を持ち、新しい見方で照射していけば、積み重ねてきた人生の時間そのものの中に、新鮮な、深い意味を蔵した無限の領域が開かれていると思う。そういう意味で、熟年・老年という考え方に縛られず、果敢に発見し、新しいものを創造していく、意欲に満ちた作品が登場してくることを期待したい。真の新鮮さとは、その挑戦のエネルギーの中にこそ、本来の輝きを放って現れてくるものだろう。

生き方に響くもの

小沢美智恵

今年も五二六編というたくさんの応募があり、人生の機微にふれたさまざまな作品に出会った。



もの、至上の世界だと感じ、ケーンこそが自分の光であると感じるのである。

文学とは、ある状況における人間の幸福と不幸を描くものだともいえるが、この作品はそれらを透明な水の底に沈め、わずかな光によってその存在を浮かびあがらせるような「抑制」に満ちている。静かな語り口でありながら、重く読者の肚の底に届き、わたしたちの人生や人間の生き方に深く響いてくるのである。

もうひとつの受賞作、楡木啓子の「線路は続く」は、世間的には何の不足もないと思える夫に永年仕えてきた妻が、小児的性格の夫に家政婦扱いされることに堪忍袋の緒を切らし、家出して離婚を考えるものの、結局夫を見捨てることができず思いとどまる話である。荷物を取りに戻った妻は、夫が風邪で寝込んでいるのを見て、「武士の情け」と世話をするのだが、夫は意固地になって用意した食事も取らない。妻が「謝るつもりも、やり直すつもりもない。自分分は離婚しようと思った」と大声を出してはじめて、夫は妻が本気であることに気づき、用意された好物のカレーを食べて、感謝の言葉を口にする。その夜夫は脳幹出血を起こし、介護の必要な体になってしまふのだが、妻は三十年かかってやっと聞くことができた夫の「ありがとう」のひと言に救われ、自分の名前を書き込んだ離婚届けを破り捨て、いつまで続くかわからない結婚生活を歩み続ける

受賞作の藤原恵一「光のケーン」は、知的障害のある一人息子を持つ父親が子どもとのふれあいを通して至福の時間を得る話である。古本屋を訪ねるきわめて日常的な場面からはじまるこの小説は、なぜ父親・良平が毎週この場所を訪れるのか、その理由から語り起こして、十八歳になる息子・ケーンとの生活を描いていく。息子の障害の状態がはっきりしたときから、会社が終わるとまっすぐ家に帰り、妻任せにせずに自ら世話をしてきた良平は、「友人たちと時間に気兼ねなく普通に会い、あちらこちらへと身軽に旅行を楽しみ、居酒屋を夜遅くまで飲みまわっていたころのこと」をずいぶん遠い世界の出来事のように思う。車が好きで高級車への夢を膨らませていた時期もあるが、「今ではもう一生ケーンのために金が湯水のようにかかることがわかっていいるから、そんなものに興味を持つことはない」。しかし「明るいもの、華やかなものは、何一つない。今の瞬間もないし、これから先も、もうずっとない」と思える暮らしのなかで、面倒に思えた息子の世話はだんだん面白くなり、生活の一部になって、「自分はケーンをこういふふうにして世話をしながら一生過ごしていくために生まれてきたのだ」と考えるようになる。そして障害児のための療育施設に送迎する車の中のケーンと二人だけの世界を、「自分の愛する子供といっしょにいる、というだけの幸福感とも違う。それ以外の、何かもつと大きくて豊かな

決心をするのである。

ありふれた話といえはいるが、夫の性格や妻の思いがよく書けていて人物像がくつきりと浮かび上がる。また別れを決意し、断念するその流れも自然で無理がない。自転車で倒れたところを助けてくれた男性に思わず体を強く寄せたくなったり、三十年の結婚生活ではじめて聞いた夫の感謝の言葉を何度も胸の内ですり返してしまふエピソードなど、底知れない妻の寂しさをよく伝えている。

ただ、そこには既成の価値をこわして世界をふたたび作り上げるといふ新しい価値を創造する要素はない。常識的な世界や慣習的な小説様式といった決められた枠の中で、さまざまなものをうまく組み合わせた作品といえるだろう。わたしはその点が少し気になったが、純文学ばかりが文学ではないし、芸術的価値に重きを置く小説ばかりが小説ではない。「銀華文学賞」はあらゆるジャンルの小説に門戸を開いているということもあり、受賞には賛成した。よくできた通俗小説は広く読者に受け入れられるだろう。実際、わたしも一女性として主人公の妻に共感を覚えたのである。優秀賞の二宮英郷「ワンスインマイライフ」は、六十六歳の英語教師と高校生の教え子の性愛を含む交流を描いた作品だが、いやらしいところの少しもない力強い小説である。兩人とも生きることに向きで、生命力にあふれており、躍動的な文体と相まって生への賛歌になり得ている。

ところどころに詩的な文章がはさまれて、それがびたりと決まったときは魅力だが、時に飛躍しすぎてわかりにくいところがあるのが惜しまれた。

以上三作を今回わたしは強く推したが、完成度という点では他にもすぐれた作品がたくさんあった。けれども最終的に選ばなかったのは、それらがわたしの胸に響いてはこなかったからだ。作品との相性というものもあるだろうが、小手先の技術では真に人を揺り動かせないということだろう。全存在については大げさだが、全体重がかかっているかどうかは作品に如実にあらわれるように思う。

他に印象に残った作品をいくつかあげる。

室町眞「幻臭」は、姑の死が引き起こした心の疲れが匂いと結びついた点がおもしろかった。

平塚司「時は流れる？」は、退職し、自分と出会う話で興味深かった。

篠宮安紀「轟音」は、北朝鮮からの引き揚げ体験のすさまじさを読者に想像させる手法で描いて力があつた。

その他、大島直次「時の余白」、大重晴よし「再会」、黒木一於「隠棲者の館」、神月ふみや「君は金比羅を見たか」、坂上弘之「メジロ色の季節」、相川柊子「予告」、岡野弘樹「母の王朝絵巻」、佃陽子「沖見茶屋」、吉野光久「緑のアリ」、前岡光明「白い哀しみ」、松丘光一郎「グランド・オダリスク」、森崎房枝「ガラス」など、それぞれに魅力があつた。

文芸思潮銀華文学賞・エッセイ賞・現代詩賞

授賞式&祝賀会・懇親新年会

読者の皆様、今年も文芸思潮 銀華文学賞・エッセイ賞・現代詩賞の授賞式および祝賀会・新年懇親会を次のように開催いたします。

どなたでも参加できます。楽しい文学の集いしたいと思います。どうぞお気軽にご参加くださいますよう、お願い申し上げます。

日時●平成二十二年一月三十一日(日)

授賞式午後二時より/祝賀会・新年懇親会六時より

会場●大田区民プラザ・小ホール

(東京都大田区「下丸子」駅前)

※JR「蒲田」駅より多摩川線乗り換え三つ目「下丸子」

駅前または東横線「多摩川」駅乗り換え三つ目

会費・飲食費●五千円

問合せ・予約申込●アジア文化社・文芸思潮

電話〇三・五七〇六・七八四七 池田・五十嵐まで

また〒090-8171-9771 まい

小沢美智恵

第2回蓮如賞優秀作

嘆きよ、僕をつらぬけ

「夏の花」の著者・原民喜の、15歳で自ら世を去るまでの、苦悩に満ちた、しかし一筋につらぬかれた清冽な生涯を、精緻な作品解説と深い共感を通して魅らせる感動の評伝傑作!

発行所 河出書房新社 定価 1300円



選考会風景

第7回 銀華文学賞 作品募集

銀華文学賞は、人生経験豊かな壮年・熟年・シルバー世代の文芸創作活動に光を当て、その小説作品を賞揚し、文学創作エネルギーを顕彰するものです。また埋もれた才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、広く社会に知らしめ、真に価値ある作品を世に残すことによって、日本文学の興隆に寄与することを目的とします。

今年もどうぞ奮って銀華文学賞にご応募ください。作品をお待ちしています。

●●募集要項

募集内容 ● オリジナルの短編小説作品。これまで同人雑誌などに発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る(複数応募者は失格とする)。

応募資格 ● 2010年6月30日現在において45歳以上の者

応募規定

400字詰原稿用紙50枚以内(20枚くらいのもので可/原稿用紙使用の場合は必ずA4の原稿用紙を使用のこと)。ワープロ原稿はA4用紙40字×30行で印字。必ず右上を綴じること。応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取って応募のこと(コピーを応募するのが望ましい)。※今年度より応募審査が1000円かかります。

別紙に①タイトル②本名およびペンネーム③年齢・生年月日(年齢・生年月日のないものは失格とする)④〒(ないものは失格)・住所⑤電話番号⑥職業・略歴⑦400字詰換算原稿枚数を記したものを添付。⑧応募部門(2010年第7回銀華文学賞応募作品と明記のこと)⑨応募審査料1000円を郵便為替で同封。外国からは11USドル。応募者には結果を通知し、希望者は作品をインターネット・ホームページに掲載する。

応募先 ● 〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

文芸思潮「銀華文学賞」係

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

賞 ● 銀華文学賞 ■ 賞状・トロフィー・賞金20万円(受賞者複数2名の場合は10万円、3名の場合は7万円)

河林満賞 ■ 賞状・トロフィー・賞金5万円

優秀賞 ■ 賞状・賞メダル・賞金3万円(数名)

奨励賞 ■ 賞状・賞メダル

選考委員 ● 作家集団「塊」メンバー

締切 ● 2010年6月30日(当日消印有効)

発表 ● 予選通過者は2010年11月末発売の「文芸思潮」38号に発表する。受賞作は2011年1月末発売の「文芸思潮」39号に発表掲載。優秀作・奨励賞など優れた作品も順次「文芸思潮」およびインターネットに掲載する。

主催 ● アジア文化社

※主催者から

真摯な文学創作に打ち込んでいる人々に光を当てたい。強烈な体験、斬新で強靱な視線、震えるような共感、心に迫る文章、魂を打つ言葉を期待しています。熟年世代・シルバー世代の底力を見せてください。

※今回より恐縮ですが応募審査料1000円を御協力くださいますようお願い申し上げます。

銀華文学賞選考委員プロフィール

小沢美智恵

おざわ みちえ

1954 茨城県生まれ

千葉大文学科卒

出版社勤務

93「妹たち」で川又新人賞受賞

95 評伝「嘆きよ、僕をつらぬけ」で蓮如賞優秀作

06「冬の陽」で千葉文学賞受賞

日本ペンクラブ会員

大高雅博

おおたか まさひろ

1954 石川県生まれ

日大文学科卒

80「旅する前に」群像新人長編小説賞受賞

他に作品「跡地の王」、共著「トライ・トゥー・リメンバー」など

小浜清志

こはま きよし

1950 沖縄県西表島隣の由布島に生まれる

69 県立八重山高専卒業と同時に上京

劇団四季、沖縄海洋博などで、舞台裏方を務める。その後も様々な職を遍歴

87 作家中上健次と知り合い、師事。マネージャーを務める

88「風の河」で第66回文学界新人賞受賞

「消える島」、「後生橋」で芥川賞候補
小説集『火の闇』(集英社)

八覚正大

はっかく まさひろ

1952 東京生まれ

早大理工学部数学科・都立大仏文科卒

教師・精神対話士

92「十二階」で新潮新人賞受賞

小説「零度の遊び」「イエロークラスター」「父のフレーム」「カウンター」ヤルポ『夜光の時計』など

教育と文学、心理学、精神分析を幅広くつなぎながら文学活動を展開

五十嵐勉

いがらし つとむ

1949 年山梨県生まれ

早大文芸科卒

79『流瀆の島』で群像新人長編小説賞受賞

84-90 タイ在住、カンボジア問題取材しながら東南アジアを遍歴

「東南アジア通信」「アジアウェーブ」を創刊、編集長

主著に『緑の手紙』(読売新聞インターネット文芸新人賞)・『鉄の光』(健友館文学賞) 他

の小説作品に「ノンチャン、NONGCHAN」、またルポ『微笑みの国タイ』などがある。

作家集団「塊」メンバー募集

作家集団「塊」は、文芸思潮および銀華文学賞・まほろば賞などを通じて、新たな表現運動を展開する作家集団です。

河林満の逝去により、欠員が出ましたので、新メンバーを募集します。

「文学界」「群像」「新潮」「すばる」など新人賞またはそれに準ずる受賞経験者で、現在の文学状況を打破したい気鋭の作家の参加を期待しています。

参加を希望の方は「文芸思潮」内・作家集団「塊」事務局に御連絡下さい。地方の作家でも、参加可能です。また受賞歴がなくても「塊」準メンバーとして参加できます。作品・自己紹介文などを送ってください。

連絡先 TEL

03:5706:7847
090:8171:9771

五十嵐まで

幻臭

世界は嫌なにおいに満ちている。——わたしがそんなふうに痛切に感じるようになったのは六十歳が近づいた、あの暑い夏の日からだっただけと思う。

今、わたしが住んでいるマンションの部屋には、おびただしい数の花たちが強烈な芳香を放っている。もちろん、においだけを楽しんでいるのではない。花たちの姿が最も美しく見えるように、その配置にも、めいっばい気をつけているつもりだ。

都内のカルチャーセンターに半年間ほど通い、そこで熱心に学んだ、色彩設計と構図の知識が大いに役立っている。トイレには造花ではなく必ず生花を飾り、居間に置いている花瓶の中には、自分でデザインして活けた季節の花が

に浮かべ、甘い香りを楽しんでいる。長年にわたる夢が、忍従生活のはてによくやく実現したのだ。最初のころ、「まるでうちは、賑やかな花壇だな」とあきれ顔だった夫は今ではもう何も言わない。でもその時分から帰宅時間が極端に遅くなった。

たぶん男である夫には、花に囲まれた生活というものが、どこかしら居心地悪いものを感じられるのだろう。無理もない。女と男では感性も違うし、価値観も異なる。冗談めかして言えば、夫には「花」よりも「華」のほうが興味深いはずだ。

配達にくる花屋の店員は、わたしの家を「花の館」と呼んでくれる。「このあたりで一番綺麗なお部屋ですよ」と褒めてくれる。多分にお世辞めいたフレーズではあるが、悪い気分では決してない。

香水のコレクションだって、四、五十種類以上はあるはずだ。でもそれだけにとどまらず、わたしは消臭ポットやトイレの除臭剤、服にこびりついた雑臭を除去するスプレーといった日用品を、いささか変質的にたくさん購入して、部屋のありとあらゆる場所に置き、身辺に充満している嫌なにおいを根絶しようと腐心もしている。

むろんまったく悪臭がない、というわけではない。トマトやキュウリは冷蔵庫の中で気づかないうちに内部から腐っていく。流しに置いてある三角コーナーは、ちよつと油

室町真しん

絶えず香っている。廊下にも観葉植物の鉢がところ狭しと並べてある。そしてベランダでは、かわいらしいパセリやバジルといった香草を育てている。

花は何と言っても生花に限る。若々しい息吹が葉脈や茎や花弁の隅々にまで流れているからだ。耳を澄ますと、その微かだけれど確実な音が、わたしには聞こえてくる。

こまかく計算したことはないが、毎月の花代はおそらく六、七万円はくだらないと思う。毎週二回、こちらがいちいち注文しなくても、定期的に新鮮な花が届くように近所の花屋と契約している。

花に囲まれた生活は実に心地よい。わたしは入浴するときさえ、赤い薔薇の花弁を浴槽

断をすれば生ゴミが腐臭を放つ。あらゆる悪臭から隔絶された「無臭生活」をすすすのはこの世の中では不可能に近い。とにかく、できるだけ悪臭の元から遠ざかって生きていたいと、わたしは常に願っている。日々努力もかさねている。悪臭の最大の元凶だった姑はすでにこの世にはいない。

夫には気の毒だが、これほどせいせいすることはない。夫にはあの人、あの時期、本当にひどいにおいだったのだ。だれひとり理解してくれないが……。

わたしにとって現在残されている悪臭の根源は、唯一、夫だけだから帰りが遅くたってまったく気にはならない。夫の加齢臭は歳をかさねるごとにどんどん悪化する一方だ。長く一緒にいると、不快感がつのって仕方ない。

そんなふうな生活になってから、すでに一年ほどの月日が経過している。そのころから明らかにわたしは変わったと思う。

そろそろ午後三時になる。

長女が訪ねてくる時間だ。ジャスミン茶の用意をしよう。血は争えないという。あの子もわたしに似てにおい好きだ。二人の好物のミルフィーユはすでに用意してある。

「ねえ、ママ。香水かえたでしょう?」
やってくるなり、長女は玄関先でそう言った。

「よく分かるわね」

「分かるわよ。わたしだって女だもの、香水のいいには敏感よ。アナスイね、若い人が好きなフレグランス」
 「中年女には似合わないかしら？」
 「大丈夫よ、ママなら。たいがいの香水は自分のものにしちゃうから」

長女との会話は実に楽しい。お茶を飲み、その豊かな香りを楽しみなが、ケーキを食べ、におい談議や食べ物のお話や、ファッションの話題に花を咲かせていると、あつと言う間に午後のひとときがすぎ去ってしまう。

次女はまったくと言っていいほどここに寄りつかない。性格が大雑把すぎてわたしとウマがあわないのだ。お洒落にも食事にも、もちろんにおいにもまったく関心を示さない。わたしには内緒で、こっそり父親——わたしの夫だ——と待ちあわせ、二人にとつて共通の趣味である競馬観戦にしばしば出かけている。

一度も行ったことがないからあくまで推測だが、競馬場には、たぶん間違いなく馬の糞のにおいや、腐乱した藁が放つ嫌なにおいが充満しているはずだ。また何万人もの人間が群れているいじょう、様々な体臭や異臭が混じりあつて、場内をすつぱりと覆っているとも考えられる。そんなところにわざわざ出かけていく神経がさっぱり理解できない。獣にお金を賭ける気にもならない。そんな余裕があるのなら、わたしは花や香水を買う。

世にある苦味はだいたいの不味くて嫌なものだけど、煙草だけはまったくべつ。苦いけれど旨味があるの。だから無理。たぶんあなたには分からないだろうけどね。それより晩ご飯どうする？」

「いつものところにしようか」
 長女には子供がいない。だから自由な時間がいっぱいある。

「どうせうちの人は食べてくるだろうからさ、もし食べてこなかったとしても、きつと自分でラーメンか何か作って食べるでしょうよ。それよりママのほうは平気なの？」

「うちも同じよ。きつと銀座か赤坂で、華のあるお姉さんと遊んでくるわよ」

二人の笑い声が居間に響きわたる。

「ところでママ、生ゴミがちよつと臭いよ」
 「そうかなあ？」

慌てて台所にいき、ゴム手袋をはめて三角コーナーに残っていた生ゴミの始末をした。臭いとは思わなかった。もしかしたら歳を取って臭覚が鈍つたのだろうか。

長女がいつものところと言つたのは、家のそばにあるフレンチ・レストランのことだ。お洒落な大理石のカウンターと、檜で作ったモダンなテーブル席がわずかに四つだけしかない小さな店だ。オーナーがイケ面で、しかもセンス

でもそれはそれでかまわない。デリカシーというものを持ちあわせていない、似た者同士は一緒にいればいいだけの話だ。わたしはぜったいにそんな場所にはいかない。

わたしはわたしで次女夫婦の家を訪ねたりしない。いつのころからか、そう心に決めていた。あの家には育ち盛りの男の子が二人もいて、絶えず汗臭さに満ちている。長男は軟式野球、二男はサッカーの選手をしている。だから玄関には泥だらけの靴が散乱し、洗濯籠の中には酸っぱいにおいのするユニフォームや靴下や下着が、いつもうず高く盛りあがっている。そういう様子は男の子を持たなかったわたしには耐えがたい。

競馬場なんかにはいかないでさつさと洗濯をするべきなのだ。

「いい加減にやめたらどう」

長女が言った。

「煙草？」

「そう」

煙草のにおいだけは別格だ。わたしは女だてらにかなりのヘビースモーカーだから、灰皿からは吸い殻のニコチン臭がたえず漂っている。でもまったく臭いとは感じない。

「これだけはね、ちよつと無理なの」

「ママらしくないよね。臭いと思うけどなあ」

「そうかもしれないけど、煙草の香りは大好きなの。この

のいい料理を出すから鼻屑ひんにしている。

電話を入れるとすぐに予約が取れた。お気に入りのマックス・マラーのドレスに着がえ、長女と連れ立ってすぐに家をあとにした。

外に出ると空模様があやしかった。空の端がうっすら夕焼けしているのに、黒い雲が上空を覆いつくさんばかりに急速に動きはじめていた。ムツとした暑気が、あたり一面に漂い、鼻の粘膜がねっとりねと疼く。見あげると空の真ん中に亀裂が入っていた。いや、そんなはずはない。ただそういうふうに見えただけだ。妙な錯覚だ。

遠くのほうから雷鳴の音が近づいてきた。街が突如真っ暗になった。「傘、持ってくればよかったね」と長女が振り向いて言った瞬間だった。舗道に大きな落下音が響いて、突然激しい雨が降ってきた。東南アジアに旅行したときに、しばしば遭遇したスコールのような降り方だった。

一気に走った。アスファルトがたちまち漆黒に濡れ、くするぶしや、ふくらはぎに痛いほどの雨が叩きつけてくる。間断なく稲妻が光って、そのたびごとに建物の陰が一瞬だけ目を射ぬくように黄色く輝く。

走っているわたしの背後を脅かすように、いつの間にか雨のにおいが追いかけてきた。そしてあの人の体から漂い出していた、あの悪臭の記憶が鼻腔を刺して強く浸透していった。それはどんなふうにも防衛しようと努めても、わた

しの記憶の深部に染みこんで離れないでいる、耐えがたいにおいだった。

店の中に入ると、「いやあ、ときならぬ夕立て気の毒でしたなあ」とオーナーが慌てて大きなタオルを持って駆け寄ってきた。二人の体や頭を交互に丁寧にふいてくれる。長女を連れてしばしば訪れるから、店の対応は丁寧に親切だ。

珍しく客はだれもいなかった。まだ六時前だ。混んでくるのはこれからのだろう。効きすぎた冷房が、驟雨で濡れた皮膚に鳥肌を立てさせている。オーナーはスマートな仕草でわたしたちを予約席に案内してくれた。カタンという微かな音がしてクーラーが止まった。「体が温まったら、またおつけしますから」と奥から店員の声が出た。

長女は寒そうな仕草で腕をさすりながらメニューに目を落としている。

「ママ、おませでいいよね」
わたしは頷いた。

「今日のメイン・ドイツシユは鴨肉の香草焼きみたいよ」
鼻腔をふくらまして、店の中に漂う料理のにおいを嗅いでみたが、どうにも妙な感じだった。何の香りもしない。オーナーが赤ワインのボトルを持ってきて、ラベルを見せてからグラスに注いでくれた。テイスティングを、とうながされ、グラスを鼻に近づけてから口に含んだ。年代やシ

インの微妙な味だつて分からない。

「ママ最近少し変よ」

長女がじつとわたしの目を見つめながら、唐突にそう言った。

「どこが変？」

「何てゆうのかな。外見じゃないの。外見のママは確かに若いよ。その歳で偉いなって感心してる。若さを保つためにいろいろ努力してるんでしょ？ 部屋だっていつも綺麗にしてるし……。毎月、いったい幾らお花代につかっているの？」

「かなりの額になるわね。まあ、今は独身みたいな生活だから、そういう生活ができるんだけどね」

「そうね、あたしたちきょうだいが家を出て、お婆ちゃんも亡くなったしね」

長女が自分のグラスに目を落とす。

「……たぶん意識の問題かなって思うの、ママが変わったのはさ」

「意識？ いったいどういう意味？」

前菜は大好きなトリュフのサラダ仕立てだった。しかし茸特有の潤いが舌にのせても染みこんでこない。カンナで削った木屑を食べているみたいに味気ない。

「意識ってどういう意味？」

思いきつて、もう一度訊いた。

ヤトーの名前から推測すると、かなり高級なワインのようだったけれど、どういうわけか香りが分からなかった。

「どうかした？」

長女が気づいて訊ねた。

「べつに。夕立て濡れたせいかな、ワインの香りがぜんぜんしないの。鼻が変」

「風邪ひいたんじゃない？ いい香りよ」

「そう？」

わたしは再びワイングラスに口をつけた。

「美味しい」

無理してそう言ったものの、舌先がどうかしているのか、味も感じられない。

以前、あんこが入っているとついこんで食べた鯛焼きの自身が、実はクリームだった、ということがあった。そのとき、わけが分からない恐怖感と大きな違和感にとらわれて思わず鯛焼きを吐き出してしまった。人は先入観で味を感知しているという一例なのかもしれない。あのときは本当にびっくりした。

今日はそれともまた違う。まったく味が感じられないのだ。店に頻繁に通うようになって以来、キッチンから漂ってくる、さまざまな食材のにおいを嗅ぎ分けるだけで、その日の献立がおおよそ想像できるようになっていたが、そのにおいの嗅ぎ分けにどうしても自信が持てなかった。ワ

「あのね」

長女がフォークを持つ手を止めて少し考えた。「意識過剰って言えば分かるかな？」

「意識過剰？ 何に対して？」

「……老い、かな、たぶん」

老い！ ひどい娘だと思った。まだ六十前なのに、わたしのことをお婆ちゃん呼ばわりするなんて。

「……ごめん、傷ついたかな。……でもやっぱりどつか変。たとえば、パパのことを、はなから汚いって、ママはそう決めつけてるでしょう？ 花やいい香りに包まれたあの家にふさわしくない存在だって、そう思ってる？ 何かバッチイ生き物みたいに、パパのことを決めつけちゃってないかな？」

「そんなことない」

「ならいいけど、パパにだつてかっこいい時代があったのよ。あたし、娘ながらに、パパはすてきだつて思ってた時期があったもん。でもパパはもう初老よ。加齢臭ぐらいあったって普通よ。許さなくちゃ。一緒に生きてるんだからさ」

「知ってたんだね」

長女が頷く。

「ママはさ、それが今、一番嫌なの。ママは臭いのが絶対に嫌なの。アラミスのコロンをわざわざ買ってきて、パパ

につけさせているのよ、毎朝。でも帰ってくるころには加齢臭がするの、パパの体から。ああ、嫌だ。思い出したくない」

長女が首を振る。

「ねえ、ママ。いいこと？ それって必要悪よ。みんな歳を取ればそうなるの。避けられない必然なの。そこから目をそむけたって何にもはじまらないの。違う？」

わたしは答えなかった。何でこんな楽しい日に、長女は急にそんなことを言い出したのだろうか。

「ご忠告をありがとう、考えてみる」とわたしは言った。スープはかぼちゃだった。生臭い牛乳の味ばかりを舌が拾っている。味覚がどこかで確実に狂っている。めったにないことだった。やはり風邪をひいたのかもしれない。

気がつかないあいだに店は満席になっていた。クーラーもいつもどおりの温度に戻っている。悪寒もほほおさまっていた。味も香りも楽しめないが、ワインで体が温まっている。味も香りも楽しめないが、ワインで体が温まっている。

まだ小学生の高学年だったころ、わたしは花の香りが大好きな少女だった。暇さえあれば商店街の花屋にいつて、ありとあらゆる種類の花々を飽きることなく眺めつづけていたものだ。

花に魅了されていたおもしろい理由は、もちろん花卉の色の

がほとんどできなかった。いじめにもしばしばあった。それでもかまわなかった。

カブトムシのにおいは縁側で寝転んでいるときに感じる日向のにおいと一緒だった。あるいはクワガタムシのにおいは、庭に干していた蒲団を取りこむときに鼻腔を心地よくくすぐるお日様のにおいと一緒だった。鼻の奥に虫たちの体臭が漂ってくると、なぜだかくすぐったいような、落ち着かなくなるような妙な気分が襲われたものだ。

指の先に残っている虫たちの体臭を嗅ぐのが好きだった。たった一年間の命だということを知らずに、ただその日その日を、本能だけで生きている儂い生き物たちのおいが大好きだった。でも、どうして甲虫類の体臭を好んでいたのか、まったく覚えていない。きっとあのころの貧乏生活が、ある意味で、わたしをそんな変な少女にしていたのだろうか。

客の大半は女同士だった。一組だけ初老の夫婦が奥のテーブルに坐っている。夫が妻のために料理をこまめに取り分けている。そのたびごとに妻は笑顔を浮かべ、両手を、まるで仏様を拜むようにあわせて、ありがとう、と感謝の言葉を口に出している。理想的な老夫婦に思える。

食後のコーヒーが出されたとき、たぶん夫が鞆の中からそっとプレゼントをわたす算段なのだろう。何かの記念日

鮮やかさと、かたちの多様性だったけれど、一番の要因はやはり香りの気高さだったと思っている。とりわけ薔薇の花の微細な芳香を好んでいた。花屋の前に坐っているだけで、何とも幸福な気分になれたのだった。

当時、わたしの家は貧しくて花を買う余裕などまったくなかった。両親にとって花などというものは贅品以外の何ものでもなかった。花を望むゆとりがあれば米を買った。だからといって家の中に花のにおいが皆無だったわけではない。近所には、曼珠沙華や山百合や野薔薇がいたるところで咲いていた。採集してくれば、家の中を花の香りで満たすことができた。あえて店で買うまでもなかった。

だがわたしにとって、自然界に咲き乱れる花々と、花屋に並んでいる洗練された花は本質的にまったくべつものだった。わたしには、店先に並んでいる花は観賞用に栽培された、ある種「人工的な美」にあふれる生き物だった。そういう花に囲まれる生活をわたしは長いあいだ切望しつづけてきた。

もうひとつだけ好きなにおいがあった。この話をするとき、たいていの人はびっくりするけれど、カブトムシやクワガタムシといった甲虫類の体液が放つにおいだった。

男の子ならそういう子供も幾らかはいただろうと思う。

女の子で昆虫が好きだったのは、間違いなくクラスでわたしひとりだけだった。変わった女の子と敬遠され、友だち

という気配を感じる。妻の誕生日か、結婚記念日だろう。プレゼントをもらった妻は、きつとその日一番の笑顔で、夫の優しさや愛情に謝意を表すはずだ。それとも、もうプレゼントは妻に手わたさずみなのだろうか。

そんなつまらない妄想がつきつきに湧いてくる。わたしは老夫婦を妬んでいるのだろうか。

自分たちのテーブルに目を移し、さつき長女が語った話を頭の中で幾度も反芻してみる。長女の話はどう考えても不快だった。どうして母親が娘に責められなければならぬのだろうか。白い平皿に、そのまま残されたトリュフの姿をぼんやり眺めてみる。

不意にあの嫌なおいが鼻腔全体に蘇ってきた。汗と汚物にまみれた、たまらない腐乱臭だった。

昔、新宿駅の構内にたむろしていたホームレスの男たちが全身から発散させていたあの異臭だった。いや、違う。去年のある一時期、ホームレスの浮浪者たちの体臭とまったく同じ異臭が、わたしのマンションの中に充満していたことがあったのだ。

あの人の体が、死に向かって確実に進行していた時期に常時漂っていたあの悪臭だ。思わずきつく目を閉じる。

トリュフの乾いた色が、きつといつの間にかわたしに喚起させたのだろうか。ベッドに横たわって寝ていた姑のあの皮膚の色を。あの人の膚は干からびた土の色とそっくり同

じ色をしていた。トリュフと同じ色だった。あの人が今、白い皿の上に横たわって寝そべっている……。

あの人が突然脳梗塞を起こして倒れたのは昨年の梅雨の終わりだった。それまで元気だったのに何の前触れもなく倒れたのだ。

普段なら、どんなことが起こっても、「仕事だ、仕事だ、俺は忙しいんだ。おまえがひとりでおまかせしてくれ」と言っただけで、まったく取りあってくれなかった夫なのに、知らせを聞くと、その日に限って蒼白な顔で病院にすっ飛んできた。意識がはっきりしない姑の体にしがみつくなり、まるで子供のように臆面もなく泣き出した。看護婦と主治医が慌てて引きはがしたくらい取り乱していた。

まだ死ぬと決まったわけではないのに、とわたしはいささか冷やかかな気分になった。今でもその日の出来事をはっきり記憶している。それほど夫の態度は尋常ではなかった。日ごろから母親思いの人ではあったが、はじめて見た姿だった。

幸いなことに姑の意識はほどなく回復した。ただ重い障害があとに残ってしまった。左半身がほとんど言うことをできなくなっていた。

姑がマンションに戻ってから、わたしの忍従生活がはじまった。姑の食事の仕度から、着がえや、洗髪、はては排

共有できなくて、いったいだれが夫婦などと言えるのだろうか。

姑の体臭は死期が近づくとつれていっそうひどくなった。タンスの中にしてしまっておいたわたしの服や、棚に収納されている食器にさえ腐臭は染みこんでいた。わたしはあの人、人の腐乱臭を着て、あの人、人の異臭と一緒にものを食べ、あの人、人の排泄物の悪臭を我慢しながら暮らさざるを得なかった。

「ママ大丈夫？」という長女の声で現実を引き戻される。テーブルの上をぼんやり見ると、鴨肉のローストがサーブスされている。食欲はまったく湧いてこない。まわりのテーブルに坐る客たちはまだかぼちゃのスープをすすっている。

「きつとお婆ちゃんね」と長女が呟いた。「ママをおかしくしたのはお婆ちゃんなのね」

「何のこと？」
「何のことで？」

「ごめん、嫌な役目をみんなママに押しつけちゃって。辛かったのよね」

長女の目から細い涙がこぼれ落ちていった。

「出ようか？」とわたしは言った。「どうもママ、今日は調子が悪いみたいだから」

泄の世話まで、介護はほとんどわたしひとりではなければならなかった。

病院で、あれほどまでに錯乱した夫は、まるで何ごともなかったかのように仕事人間に戻っていた。わたしは朝から晩まで毎日ひとり、寝たきり老人になってしまったあの人と暮らしはじめた。

あの人の体がたまらない悪臭を放つようになったのは夏に入ってからだった。真夏日が一週間以上連続した暑い夏だった。

部屋の中に行くと、何を食べても姑の体においがして仕方がなかった。どこにいても姑の周辺に漂う死臭から逃れられなかった。眠っている夢の中にさえ臭気は忍びこんできた。毎日毎日、姑の体からにじみ出してくるにおいと一緒に暮らしていた。

耐えきれなくなって夫に訴えたことがある。だが夫はのんきな態度で「そうかな？ 臭いかな」と答えるだけだった。とぼけている様子ではなかった。本当に臭気に気がつかないという態度に思えた。

そのときからきつとどこかで確実に夫が信じられなくなっている。寝たきりになったのはわたしの母ではない。夫の実母なのだ。もちろん妻なのだから、やれるだけのことにはやる。でももう少しわたしへの思いやりや、感謝の気持ちを表して欲しかった。だいいち、同じ臭覚と同じ味覚を

長女がハンカチで目頭をぬぐいながら、小さく頷いた。皿の上には鴨肉のローストがそのまま手をつけずに残されている。

「ごめんね」
お勘定を頼むと、オーナーが青い顔ですっ飛んできた。

「どこかお気に召さない点でも」
「いえ、こちらがいけないの。料理には問題ないわ。風邪で食欲がないだけなの。ごめんなさい」

そう言って慰めた。それでもオーナーの顔から、怪訝そうな表情はなかなか消え去らなかつた。

店の外に出ると、夕立はすっかりあがっていた。家の軒からときおり雨垂れが落ちて、街灯の光を鈍く反射させている。アスファルトの舗道から立ち昇る水蒸気が暑気をいっそう激しくしていた。街はすつぽりと、降り残された雨のにおいに包まれている。思わず咳きこんだ。

駅に向かって歩きながら、姑と同居していたころの日々を思い出す。とくに仲が悪かったわけではなかった。むしろ逆だった。姑は二人の娘にいったい愛情を注いでくれた。ハイカラな料理の作り方を知らなかったわたしを基礎から親切に鍛えあげてくれた。我が儘勝手な夫とのあいだをしぼしばし上手に取り持ってくれた。

感謝こそすれ憎悪する点などほとんどない、優しい人だ

った。それなのに病に倒れ、寝たきりになって死臭が漂いはじめてから、わたしはあの人と一緒にいるのが耐えられなくなってしまう。

いつしか、世界は悪臭に満ちている。そんなふうに感ずるようになってしまった。きっとわたしはひどい女なのだ。あの人の死後、わたしは花のある生活設計に没頭した。マンションの部屋じゅうに染みついていて死のにおいをおいとか拭拭したかった。

死臭は、姑が寝ていた介護ベッドを始末しても、あるいは枕や蒲団やシーツを遺棄しても、部屋のいたるところに残存してなかなか消え去らなかつた。夫は「俺には臭くないがな、おまえが神経質になっているだけさ」と言っていて取りあつてくれなかつた。

夫に悟られないように少しずつ食器を買いなおし、古い服を処分して新品に替えた。そしてカーテンや壁紙をリフォームしていった。そのあとで花屋と契約した。あの人死臭がすべて消え去るまでに、およそ一年近くかかった。そのようにして、わたしのマンションはしだいに「花の館」に変わつていった。

「ママ、少し休むのよ。海外旅行にでもいこうか。あたしならいつでもつきあうから」

別れ際にそう言い残して、長女は駅の改札の向こうに消えていった。

眞目にみても香りに鈍い人間だ。旅行中のお荷物になるのは間違いない。やはりひとり旅か、長女と二人だけの旅がいい。そのほうがずっと気楽だ。

わたしたちの夫婦生活もそろそろ晩年に入る。夫と二人だけの生活がこれからずつとづついていく。だがまさにそれこそが難問なのだ。些細なことや、つまらない部分で、お互い妥協ができなくなっていくはずだ。

明朝は花が届く日だ。久しぶりに活け花に没頭しよう。あの部屋には、もうあの人死臭はなくなっているのだ。すべてはわたしの幻臭なのだ。

それから数日後の日曜日の午後だった。わたしは散歩がてら、駅前にお気に入りの喫茶店に向かつて歩いていく。ロースト・ビーフのサンドイッチが自慢の店だ。

夫は部下の結婚式に出かけていて不在だった。わたしはその店で、小説でも読みながらのんびりとしたひとりだけの時間をすごそうと思っていた。頬をかすめて通りすぎたゆく風に、微かに秋の気配が漂っている。

大きなマンションをすぎ、角を曲がろうとしたとき、長いあいだ風呂に入っていない浮浪者の体から染み出してくるような強烈な悪臭が鼻腔を歪ませたのだ。どこにもわたしはあたりの様子を注意深く見まわした。どこにも

旅行か、それもいいかもしれない。久しぶりに夫に相談してみようか。案外喜んで受け入れてくれるかもしれない。夫は旅行好きで、最近こそ少なくなつたけれど、昔は年に何回か二人で連れ立って、あちこちの国へ出かけたものだ。最後に夫と旅行したのは、たしかベトナムのホーチミンだったはずだ。長女が一緒だった。胡麻油と香菜とニョクナムの香りが街じゅうに漂っていた。マニラもそうだった。バンコクもそうだ。どこにいても、その国特有のにおいがする。車が吐き出す排気ガスのにおいさえ、国によってそれぞれ異なっている。

けれども不思議なことに、旅人はイミグレーションをくぐつたとたん、一瞬だけ違和感を覚えるが、鼻がその国のにおいにすぐに慣れてしまう。外国人が日本の空港に降り立つたとき、真っ先に感じるの、やはり醤油の香りだろうか。たぶんそうなのだろう。

人の臭覚とは、本来ならそういうものなのだ。まわりの環境にすぐに慣れるのだ。でも歳を取つてくると、事情は微妙に違つてくる。

家にはその家特有のにおいがあるという。今のわたしの家はさしずめ花の芳香だろう。アムステルダムにでもいつてみようか。はたして夫は、チューリップの香りやチーズのにおいをどんなふうを感じるだろうか。

でも残念なことに香りに鈍感な人間もいる。夫はどうも

それらしき人物は見出せなかつた。道路にはだれひとり歩いていない。

ゴミの集積場所には、生ゴミが詰められたビニール袋は置かれていない。いったい何のにおいだろう、どこから漂ってくるのだろうか。小リスのようにひくひくと鼻を動かし、もう一度臭いの元を探してみた。するとどうやら上のほうから悪臭が降りてきているらしいということが分かった。

空を見あげた。上空には白い綿雲が二つばかり浮かんでいるだけで、あとは青い空がのどかに広がっている。電線に動物の死骸をくわえた鴉でもとまっているのかと疑つてみたけれど、雀すらいない。それでも嫌なにおいは強く舞い降りてくる。

「おばさん、あんた、クサイぜ！」

突然背後から男の声がした。

びっくりして振り向くと、袖口が破れ、ズボンの裾がほどけたボロ着をまとつた浮浪者ふうの男が、汚い歯を見せて笑いながらわたしを見つめていた。着衣には幾重にもひどい汚れがこびりついている。恐怖に引きつって思わず駆け出した。

「おばさん、クサイぜ！」

男はゾンビのようなボロボロの姿で執拗に追いかけてきた。夢中で逃げた。浮浪者のズボンの裾が地面をこする音が、いつまでも背後で響いている。悪臭と浮浪者から一歩

でも遠くへ逃れようと必死に走りつづけた。

息があがってしまい、やむなく立ち止まったとき、家とは反対側、線路のはるか向こう側の町に逃れついていた。

恐る恐る振り返ってみたが追手はもういなかった。膝が笑って自由に動かない。何てひどいヤツなんだ。こともあらうに、わたしがクサイなんて。とんでもない。怒りが突きあげてきた。

肩で大きく息をつき、とほとほと家に向かって歩き出した。

その直後の驚きをどのように表現すればいいのだろうか。悪臭の元凶であったはずの浮浪者の姿は消え去っているのに、どういうわけか酸っぱいにおいがわたしの周囲に漂っていたのだった。

ふと見まわすと、すれ違う行人たちがみんなわたしの不快げに見くだして笑っている。その口元は「あんた、クサイぜ！」と、一様に言っている。声としては聞こえなかったけれど、間違いなくそう言っているのだった。

悪臭の元はともあるうにわたし自身だったのか、思わず叫んでしまった。激しい疑念が渦を巻いた。

だが、鼻を閉ざしても、息を詰めても、悪臭がつきからつきへとわたしの内部から染み出してくる。吐く息が嫌な口臭を放った。わたしの皮膚の底から、あのころのあの人のような腐乱臭がにじみ出してきた。

そのあとを追いかけるように、甲虫類の体臭が幻のように蘇って香ってきた。少しだけ気分がなごんだ。夫とあの人の顔が、ぼやけた視線の彼方にぼんやりと浮かびあがってくる。

あの人が息を引き取った日の光景がありありと蘇っている。わたしは、今契約しているあの花屋にはじめて電話を入れ、数万円分の花を持ってこさせて、あの人が眠っているベッドを賑やかに飾り立ててあげたのだった。さんざん疎んじたことへの詫びの気持ちもあったが、不意にそういうふうに見送ってあげたくなったのだ。あの人の萎びた顔に、それでも花々はよく似合っていた。老いてなお、女には「美」が必要だと心底思った。

しかし死臭だけをこの家に確実に残して、あの人が逝ったことは間違いない。その後の一年の日々が、どれほど辛いものであったのか、その苦痛を知っているのは、わたししかない、とずっと思いつめてきた。本当は夫と分けあうべきだったのだ。ふっと張りつめていた力がぬけていくのを、わたしは感じた。

窓の外を眺めながら、もう一度、少女の時代に戻れるだろうか、と呟いた。

お風呂に入ろうと、立ちあがったときだった。背後で花が踏み締められる音がした。びっくりして振り返ると、引き出物が入った、大きな紙袋を持った夫が、放心したよう

すべての行人がわたしを嘲笑している。混乱しながら再び駆け出した。駆けながら、あの美しい花たちの姿をひたすら夢想した。あの気高い香りを吸いこみたいと幾度も思った。マンシヨンの階段を駆けあがり、ドアを開けると部屋の中に飛びこんだ。

消臭スプレーを両手で掴むと、部屋の中のとあらゆる場所に振り撒いた。それから息つく暇もなく、花瓶から活け花を驚掴み、絨毯の上にはばら撒いた。そして散乱した花の上に寝転んで、猫のように体をこすりつけた。

それでもなお悪臭は消え去らなかつた。

「幻臭ではない！」

わたしの体のいたるところから、夫と同じ加齢臭が染み出している。加齢臭はやがてあの人のように死臭へと変わるはずだ。鏡台から香水を取りあげると、自分に向かって吹きつけた。甘い香りがたちまち広がっていった。わたしは虚脱したまま、ながいあいだ、そのように絨毯の上に坐りつづけていた。

ふと気づくと、窓の外に夕焼けが広がっていた。悪臭はすでにどこかに消え去っている。わたしはようやく重い体を起こして立ちあがった。震える手で窓を開いた。日向に干した柔らかい蒲団のにおいと、乾いたお日様のにおいが漂ってきたような気がした。

に突っ立っていた。

「……おまえ……」

夫の目にはとまどいの濁った光が射しこんでいた。

思いきって夫の胸の中に飛びこんでいった。一瞬だけ夫の体が揺らぎ、壁に激しくぶつかったが、そのままの姿勢でしっかり抱きとめてくれた。

不意に大粒の涙があふれ出していった。わたしは臆面もなく、夫の腕の中で子供のよう大きな声をあげて泣いた。そんなふうには、夫の前で泣いたのは結婚以来はじめてのことだった。

わたしはめりこんでいってしまうほど、深く夫の胸に頬を埋めて甘えた。夫の体からもわたしの体からも、もうあの加齢臭は漂ってこなかつた。

「ねえ、久しぶりに海外旅行でもしない？」と夫に問いかけた。

錯覚だったのかもしれないけれど、うん、という感じで、夫が微かに頷いたような気がした。

はじめて応募した第3回・銀華文学賞で奨励賞を受賞。翌年は入選。そして昨年度は第三次予選で落選の憂き目を見ました。書くことに慣れていったのとは逆に、成績は悪くなる一方です。今回の締め切りが近づき、「何とかしなければ」と焦りましたが、ではいったいどう書けばいいのか、さっぱり分かりません。その時点で、納得がいかないまま『幻臭』の第二稿はすでにできあがっていました。さうざん考えたあげく、ややオーバーな表現で——あくまで僕の意識として——改稿してみようと思いつきました。

最終稿を書き終えたとき、正直言って、第二稿よりは主人公の人物像が明確になったのではないかな、と感じました。でも同時に、やはりもっと普通の表現にすればよかったのでは、という反省も残っていました。迷いながら、結局、そのまま原稿を郵送。

五十嵐編集長から電話で受賞の知らせをいただいたとき、右のような二つの思いが、瞬時に頭の中を交錯しました。今もどちらがよかったのか、その答えは分からないままです。

受賞を喜ばしく思いつつ、小説を書くことの難しさを実感しています。この優秀賞受賞を糧として、もう一歩深い表現に向かわなければならないと、あらためて気が引き締まりました。本当にありがとうございました。

表現力を鍛えよう！

作家集団「塊」プロ作家による

作品 添削講評

文芸誌新人賞作家があなたの作品を添削・講評の通信指導をします

懇切丁寧・的確な指導であなたの作品をレベルアップ！

飯田章（群像新人賞）・八覚正大（新潮新人賞）・大高雅博（群像新人長編小説賞）・小沢美智恵（蓮如賞）・五十嵐勉（群像新人長編小説賞／インターネット文芸新人賞）
「文芸思潮」の読者には特別料金で指導いたします。

あなたの作品を作家集団「塊」宛にお送り下さい！！

詩

1篇 3枚以内 3000円

エッセイ

1篇 5枚以内 4000円

10枚以内 5000円

小説

1篇 20枚まで 7000円

50枚まで 10000円

100枚まで 15000円

200枚まで 20000円

●ご希望の作家と面談指導も可能です。

●ご希望の方には案内所を送付します。お電話・ファックス・葉書などでお問い合わせ下さい。

作家集団「塊」事務局

〒158-0083

東京都世田谷区奥沢 7-15-13

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848

asiawave@qk9.so-net.ne.jp

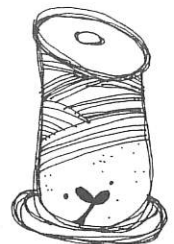
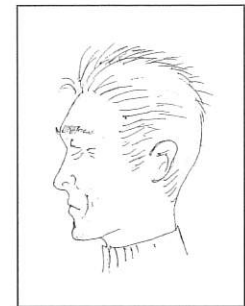
室町 眞

むろまち しん

法政大学 文学部 日本文学科 卒業
版下業、海外旅行企画、旅行雑誌編集者などを経て、現在、漫画家やイラストレーター等の人材発掘業務を担当。

学生時代は漫画家になりたいくて『COM』に投稿しては落ちていた。

社員時代はシナリオライターを目指し、六本木の教室に通っていた。先生は、池田一郎（隆慶一郎）氏。ほとんど飲むだけだった。



ガラス

森崎房枝

終戦の年から三十年が経った夏、弓子は三十八度の熱が二日ばかり続いて、風邪は治ったものの、その後、夜の九時頃になると熱が出て脇腹が痛むようになった。弓子は近所の医師の勧めで被爆検診に通っている並木病院へ行き、そのまま腎盂炎の疑いで入院した。外来で、入院予定は一週間と聞いていた弓子は、手続きの段階で、大部屋しかないと言われた時にも、一週間のことだわ、と思って気にも留めなかった。

手続きが終ると、弓子はエレベーターで二階の病室へ案内された。六人部屋だった。壁に頭を付けた三つのベッドが左右に並んでいた。右側の三つは塞がっていた。左側は、奥の窓際の一つに老女がいるだけだった。寝たっきりらし

いその老女の隣の、枕頭のパイプに北島弓子と名札の挿してあるベッドが、その日から弓子の寝起きする場所になった。隣の老女の名札には、小川タカと書いてあった。

弓子は同室の四人に挨拶をして、まずはパジャマを買いに地下の売店へ降りて行った。病院へ付いて来て、手続きその他をすましてくれた夫は、弓子がうつした風邪で微熱を出していて、疲れた顔でベッドの脇に立っていた。夫は病院のベッドで一休みするわけにもいかないので、仕方なく弓子に付いて売店へ寄った。病院にふさわしい小さな売店に、L判のパジャマは一つしかなかった。

夫を送った弓子は、パジャマに着替えてベッドに入って手足を伸ばし、寝ていても食べさせて貰える入院暮らしに

んだ、うかつには付き合えない。

弓子は便所に行く振りをして化粧袋を持ち出し、洗面所の灯りの下で袋の中を掻き回した。あった。何年か前に旅行をした時に持って行き、入れっ放しになっていた耳栓である。

しかしタカさんの声は、耳栓をも徹して鼓膜を叩いた。弓子には、叫び声の合間に切れ切れの眠りをむさぼる手立てしかなかった。タカさんも、眠りの合間に叫ぶのである。

耳栓で遠くなったタカさんの叫び声は、やがて眠ることを諦めた弓子の中で、埋もれていた遙かな記憶を蘇らせて行った。当時二十歳だった弓子は、収容所の中にいて、「水、下さい」「水、ちょうだい」「水、くれんさい」「水、水」と、水を求める罹災者の声を聞きながらその人たちの看護をしていたのだった。

空襲を受ける前の呉市で、弓子の家に、海軍士官になった親戚の息子たちとその連れが、畳の上で眠りたい一心で、それぞれの艦が入港する度に、一人か二人ずつふらりと泊まりにきていた。その中の一人が、密かに漏らした言葉を弓子は忘れることができなかった。

弓子にそれを話した士官は、緒方主計大尉であり、聞いたのは昭和二十年の正月だった。元日に一人でふらりと上陸してきた緒方大尉が弓子に、溜息と共に呟くように言っ

感謝した。しかしその夜、薬を飲んだにも拘らず、消灯後にきざしてきた脇の痛みと熱は、同室の患者の寝息や鼾とあいまって、弓子を容易に眠らせなかった。弓子がようやくまどろみ始めた二時ごろに、隣のタカさんが叫び始めた。

「みず、ちょうだい、みず、ちょうだい」
すると、タカさんの向かいの窓際の、名札に上田貞子と書いてある女性が、

「はい、はい」

と眠そうな声で応えながら起き出して、タカさんのベッド脇の台に置いてある魔法瓶の水水をガラスのコップに注いで飲ませた。するとタカさんが言った。

「ありがとう、あんた、やさしいね」

「どういたしまして」

上田さんがベッドに入って、しばらくすると、またタカさんが叫び始めた。

「みず、ちょうだい、みず、ちょうだい」

上田さんはもう起きてこなかった。他の患者は、寝ているのか、寝たふりをしているのか、タカさんの叫び声には反応しない。となると、新参の弓子の胸に、落ち着かない気分がきざし、眠った振りをしていると、それが後ろめたさに変わった。困っていた時再びタカさんが叫んだ。

「みんな、はくじょうだね」

そこで目覚めた弓子の自衛本能が主張した。私も病人な

た。

「もう戦争は長くありませんよ、去年から、紀伊水道を出ると敵の潜水艦が待っていて、こちらは魚雷を避けるために、ジグザグ運行をしながら走り抜ける始末ですからね」

当時弓子は、海軍士官の宿泊施設である水交社の会計部に勤めていて、士官宛の請求書を発送していた。それで弓子は、士官の所在を知るために、毎月大きな鑑札を持って鎮守府へ行き、極秘の士官名簿を借りてきた。弓子はその士官名簿を開く度に、名簿の一ページに並んでいる八人の名前が、次々戦死の文字で消されていき、その数が月毎に増えていった。生存者一名のページさえ見掛けるようになって、弓子は恐怖を感じた。緒方大尉の言葉は、弓子の終戦を祈る心に、灯りを点してくれたのだった。

呉市が空襲された二十年七月一日の夜、「灰が峰」の中腹の、三つ池の横穴に避難していた弓子は、「灰が峰」の天辺で打ち上げる高射砲の弾が、雲の上を行く敵機には遙かに及ばず、低空で威嚇にもならない惨めさで炸裂し、その破片が落ちてくる重たい音を、打ち上げる日本兵の悔しさを思いながら、情けなく聞いていた。

その空襲で焼け出された母と弓子と弟の三人のうち、母と中学生の弟は、呉市の焼け残った場所のアパートを借りた。弓子は川内村の親戚、辻本熊吉方の離れに落ち着いた。それが七月の半ばだった。

子は広々とした青田が見える近くの窓へ走り、光の正体を見極めようと身を乗り出して空を見上げた。南の上空に、ぼつかりと浮いた白い雲が見えた。白い雲はドーナツ形に広がり、その真ん中を擦り抜ける様に、茜色の雲の塊が尾を引きながら昇り始めた。しかし弓子が、その異常に美しい不思議な雲を見たのは一瞬だった。

ドン。窓から身を乗り出して弓子の上半は、凄まじいショックで事務所の床に叩き付けられた。広島では二、三秒差だった閃光と爆風が、川内村では、窓へ走り寄って雲を見上げるだけの時間差を生じて、その一瞬が、弓子に炸裂した瞬間のきのこ雲を記憶させたのだった。爆心地では、人の肉体を焦がした閃光も、六キロ離れた川内村役場では、いとよきの熱感と、体が浮き上がるような透明感を持つ、異様な明るさだったのである。モンペ姿の弓子は、とっさに親指で耳の穴を押さえ、残りの指で目を被うという爆風よけの体勢で床に伏した。

弓子がそこまで思い出したとき、すぐ身近で突然ガチャン、とガラスが割れる音を聞いた。深夜の病室で派手な響き方をしたのは、タカさんが落としたコップが割れた音だった。

その音が、あの時のガラスの音の記憶を鮮やかに蘇らせた。きのこ雲を見ていた弓子が吹き飛ばされたあの瞬間、

広島市の北側にある川内村は、母方の祖母の籍に入っていた弓子が、子供の頃から母に連れられて墓参に通った村だった。祖母の実家の大きな仏壇のある座敷で、青田から湧き上がる蛙の声に包まれて眠り、墓参の途中、オハグロ蜻蛉に出会った思い出のある母の故郷だった。

弓子が熊吉おじさんの家に落ち着いて間もなく、おじさんが助役に頼まれてきて、弓子は手不足の村役場へ戸籍係として勤めることになった。そして一月経たない内にその惨事に出会った。

八月六日の朝、弓子は離れの蚤に苛立ち寝不足だった。それで野菜を取りにきていた母が、

「今朝広島銀行へ行こうと思うとる」

と言ったとき、

「今日当たり、空襲がなければにやええが」

と可愛げのない返事をした。本来なら娘の言い分など聞かないはずの母が、罹災後は自信喪失気味で、素直に、

「そう思うか、そんなら止めて、太田川で洗濯でもしようか」

と言った。それで母は助かった。

六日の朝、役場では五人の女子職員が掃除を終って、珍しく出勤の遅い助役の噂をしていた。すると突然、体が浮き上がるような異常な明るさに、役場全体が包まれた。弓

南側の窓ガラス八枚が打ち砕かれた音を弓子は聞いていなかった。弓子は仰向けに放り出された瞬間も覚えていなかった。放り出された後で我に返った弓子は、周りにガラスの破片が散らばっている中で、身を伏せ、親指を耳に当て、残りの指で目を被う、爆風よけの体勢を取っていたのだ。笑う気にもなれない。弓子は辺りが静まり誰かの声があったので、爆風よけの指を外して目を開けたのだった。

床にはガラスの破片が重なり合って盛り上がり、全体に散らばっていた。伏している弓子の目線には、割れたばかりのガラス片の、重なり合った切口しか見えなかった。その切口がいつせいに痛みを感じさせるような鋭い煌めきで弓子の視野にあふれた。それぞれのガラスの切口が生き物のように猛々しく、弓子の身の回りで光り輝いていた。弓子は不気味な恐怖を感じて、ガラスの破片から目を逸らした。弓子の頭の先と体の脇に、戸籍謄本を入れて壁際に重ねてあった大きな戸棚が、二個とも放り出されていた。弓子はその戸棚が放り出される音も聞いていなかった。弓子は落ちてくようにと自らを悟しながら、モンペに付いたガラスの破片を丁寧に摘み取り、払いながら起き上がり、そこにきて、呆然と突っ立っていた素子に聞いた。

「何が起こったんじゃろうか」

「それがわからんよ、さっぱり」

素子は保健婦だった。役場の中で、よそからきた者は素

子と弓子だけだった。二人は宿直室を覗いた。丸まった蚊帳の中でうごめいている者がいた。配給係の芳子だった。

「雷様でも、あるまいに」

と素子が沈んだ声で言った。助役があたふたときて、あたふたと出て行った。男の吏員たちが倒れた戸棚や、飛ばされた窓を戻し、娘たちは十キロ離れていてなお、瞬間の凄まじさを思わせてきらめいている、尖ったガラスの破片を掃き集めた。

タカさんが時々叫んでいる「みず、ちょうだい」の声が、遠く聞こえるだけで、耳栓をした弓子に、大部屋の寝息や軒は聞こえなかった。弓子は寝たつきりのタカさんに付き合わない後ろめたさから逃れるように、白いカーテンに囲まれた暗いベッドで、天井に目を向けて、二十歳の頃の無残な記憶を追いかけていた。

川内村は太田川と安川に挟まれている小さな村で、二つの川に沿う、東西二つの字に大別されていた。熊吉おじさんの家は、東の太田川に沿う中調子だったが、西の安川に沿う温井から、六日の早朝、二百人の義勇隊が、村長の引率で広島市の建物疎開の作業に出ている。助役はその残務で遅刻し、安否を気遣ってあたふたしていたに違いなかった。

耳栓をした弓子が目を向けている天井に、廊下の明かりがうつつすらと差していて、薬が効いてきたのか脇腹の痛みは消えていた。弓子はタカさんの、「コップ、ちょうだい、水、ちょうだい」の声を遠くに聞きながら、その声で呼び覚まされていく遙かな記憶を、手練り続けていた。

助役は、義勇隊の実状探索のため、腕章を付けた収入役と倉本吏員を広島へ向かわせた。橋口吏員は安川の土手で、避難してくる罹災者の受付。中井吏員は証明係で、罹災証明書を書き始めた。保健婦の素子や弓子を含む五名の女子は、配給と医療、各吏員の援助を受持つことが決まった。義勇隊を出した温井には罹災者を送らず、罹災者の看護は中調子が引き受けることも決まった。

やがて、広島に向かった倉本が帰ってきて、広島市全体が火の海で、陸からは近付けないことを伝えた。そこで、中調子が手配した舟が太田川を下った。

遅れて帰ってきた収入役は、助役を説得して、中調子の個人の自動車を借りさせた。そして、手配した担架用のカマスと竹竿を積み込んで、舟で引き上げた怪我人を車で運ぶ段取りをして、再び出発した。

午後には罹災者の数が急増した。広島から土手を歩き続けてきたと言う、その言葉が、とても信じられない重傷者

弓子たちは机に向かったが仕事は手に付かなかった。助役が戻ってきて、

「広島には何も通じないようです。電話も不通です。一体何が起こったのか」

弓子たちは不安な顔を見合わせた。大方の村民が広島と関わりを持つ暮しをしていたのだ。出動中の義勇隊、広島にいる親戚、広島の大や連隊にいる兄弟や息子、夏休み返上で通っている学徒動員の少年たち、職員の手から仕事は離れがちになり、同じ思いの村民が役場に顔を出し始めた。しかし広島市との連絡は取れず、消息は不明だった。

戸籍係だった弓子は、川内村の所帯は五百五十、人口は約二千と聞いていた。その小さな村に、万一本土決戦に備えて、川内国民義勇隊が結成されたのは昭和二十年六月、男子は十六歳から六十歳、女子は四十歳まで、三歳以下の子供を持つ母親と病人を除く全員だった。義勇隊の男女は若者を戦に取られた村で、必死に食料増産に励んでいたかきがえのない働き手だった。

弓子は十一時頃、ガラスがなくなった窓から南の空を見ていた。広島市の上空が黒く煙っていた。その下にうつつすらと、普段は見えない家々が墨絵のような軒を連ねていた。弓子は燃えている広島街の街かも知れないと思った。

昼頃初めて煤けた顔の罹災者がきて、次々訪れる人たちがみな、私の家が最初に燃え始めたと言った。

ばかりになった。着衣が焼け、剥き出しの腕の、光が当たった側の皮膚が脱げて指先に垂れていた。その周りの皮膚は肉を離れて浮き、赤く剥き出された腕の筋肉の表面には、黄色な粉のような物が浮いていた。そんな状態になった腕を前に差し出し、同じような裸足を引き摺るようにして、列をなして歩き続けてきた人たちだった。そんな目に合わされて、泣きも喚きも怒りもしないで、静かに歩き続けて避難してきた人たちに、弓子はどんな言葉を掛ければいいのかわからなかった。いくらか軽症の人の手には、途中で貰った乾パンの紙袋が握られていた。見た所は、爆風で飛ばされたガラス片による裂傷と、熱光線による火傷だった。下駄の鼻緒の跡が、火傷の足の甲にくっきりと残っている人がいた。被っていたカンカン帽の際が境界線になっている半面の火傷も見えた。

弓子が振り返って不思議に思うのは、普通なら血だるまになっているはずの、裂傷周辺の出血を見た記憶がないことだ。突き刺さったガラス片の高速の侵入が、出血の暇を与えなかったのか。裂かれた筋肉に、その瞬間、裂かれた自覚が伴わないほどの高速だったのか。裂傷の口が開いたままであったり、突き刺さったガラスが傷口で光っていた状況だけが、弓子の記憶に残っている。あふれる出血に、止血のための狼狽を体験した記憶がなかった。

村境の土手で受付けた罹災者に罹災証明書を渡し、青年

団の協力を得て中調子の各家庭へ、受入れは順調だった。

しかし罹災証明書は刷つても刷つても追いつかない状態だった。青年団や吏員に自動車はなかった。村にあったのは荷車とリヤカーと自転車だった。広島市上空の煙は、やがて周りへ広がり、川内村の空もどんよりと曇ってきた。その空の下で夜を迎えた青年団や吏員たちは、灯火管制下の真っ暗な村道を、各家庭へ、避難してきた罹災者を次々に送り届けて、夜更けて降り出した、黒い雨に打たれた。

弓子たち五名の女子職員は配給物の手配をし、広島へ行く収入役らの握飯を作り、村境の土手で受付を手伝い、弓子が家に帰ったのは十一時だった。熊吉おじさんは搬送を手伝いに出ていて、おばさんと女学生の昌子が、三人の罹災者の看病をしていた。中に全身火傷の年配の男性がいて、唸り続け、水を欲しがっていた。おばさんが、

「火傷に水はよくない言うことじゃが、あんまり欲しがってじゃけん、ちよつとずつあげとるんよ」

と言った。その人の火傷から沁み出す体液は布団を濡らし、唸り声は、離れまで聞こえていた。

唸り声を恐れて、隠れるように離れにいた母が、帰ってきた弓子を見ると、

「今朝、太田川の河原で、白い落下傘のようなもんが、川上へ向けて飛んで行くのを見たが、あれに爆弾を付けて、落とすもんじゃろうか」

をした。必要な薪その他の生活物資を調達する係は、商店主でもある倉本吏員だった。デルタの川内村には山がなかった。熊吉方でも、冬の間は暗いうちに起き、渡し舟で川を渡り、隣村の山から、背負子せおこで薪にする木を背負ってき、一年分を溜め込んで置く習慣だった。煮炊きだけならともかく、連日十体を超える遺体の火葬には膨大な薪が必要だった。しかし広島市とその周辺に積まれた遺体を考えると、薪の協力を依頼する宛などあるはずもなかった。火葬係の橋口は火葬の薪を節約する工夫を迫られた。

七日には身内を探しに来る罹災者が増えた。役場でその相手をしていた弓子に、昼近くになった頃、自転車で戻ってきた素子が、絶望的な声を掛けた。

「医者もおらんし、薬もないんじゃ」

「何事もなかった周りの医者が、駆け付けてくれても、ええんじやないんかねえ」

「広島の前は何処もかも、罹災者があふれとるんよ、少々医者では間に合やせん」

「みんな、こんな状態になつとるんね」

「ここよりひどいんよ、日も当てられんことになつとる、こんどはもう少し遠くを回って見るから」

素子はまた自転車で行った。

生きていれば這ってでも帰るはずの義勇隊員が一人も帰

と言った。

弓子は、「疲れた」と言つてそのまま眠つてしまい、朝になって黒い雨が降った話を聞いた。

弓子は明け方の気配で耳栓を抜き、起きて看護婦詰所の時計を見てきた。まだ五時だった。ついでに便所に行き、検査用のコップに朝一番の小便を採った。すぐ側の洗面所には誰もいなかった。弓子は石鹸もタオルもコップも歯ブラシも、持っていないことに気付いて、手を洗ったあと、両掌に水を受けて口をすすいだ。それから濡れた指を曲げて髪をとかしながら、焼け出された時の弓子は、熊吉おじさんの家でもこんな暮し方をしとったんかもしれん、と思つた。

七日の早朝、数人の死者が出て、証明係の中井の所に連絡があった。中井は町の駐在所へ依頼して、巡査が届けた見本を元に、検死調書の謄写版印刷を始めた。中井は印刷した検死調書を持って、巡査と一緒に届出のあった七、八名の犠牲者宅を回った。巡査も手不足で、中井は以後、検死調書を印刷し、巡査の代行を務めざるを得なくなった。以後安川の河原では、連日、死者を焼く煙が何本も立ち昇るようになった。

罹災者全員を引き受けた中調子では、各戸順番に炊出し

らない。それは村民にとつて大きな衝撃だった。義勇隊員は戦場に運ばれた若者に代わり、村の農業を担っている中年男女だった。弓子は七日の朝、隊員の家族が広島へ向かったことを聞き、八日には家族が見てきた広島島の惨状を聞いた。焼跡に転がる黒焦げや火眼れの死体、死体の中で救いを求める怪我人、水を求めて川岸に折り重なる死体、川面を埋めて浮く死体、炎天下の焼跡で水を求める怪我人、弓子は死者の激増する川内村の惨状と重ね合わせて、広島島の惨状を目の前で見ているような気がした。

慌ただしい五日間が過ぎ、交通機関の復旧を機に、行く当てるある罹災者は旅立った。残された罹災者は、役場の隣の国民学校へ収容された。一人一枚でも約七十枚近い布団が必要だった。各戸で供出する他なかった。戦争が長引いて各戸とも長い間布団を作っていないなかった。身内に罹災者を抱えている家もあった。罹災者の看護で捨てた布団もあった。各戸ともそれ以上の負担は無理だった。罹災者は罹災したままの姿で、小学校の教室の板張りの床に、布団を敷いて筵むしろを掛けるか、その逆の状態しじょうで寝るしかなかった。その上、医者がいない、薬がない、ガーゼも脱脂綿も包帯もない、弓子は胸が塞がる思いだった。収容したと言うだけの収容所で、弓子が火傷に塗った薬も、傷口に塗った薬も、消毒薬だけだった。無色の消毒薬とヨーチン、赤ん坊

の臍の痕に付ける黄色の粉薬、それが保健婦の素子が自転車で走り回って集めてきた薬のすべてだった。

収容所で弓子が手当てをした人は、二十歳の弓子から見れば、お爺さんだった。お爺さんは細い首筋の左側が大きく膨れていて「痛くて眠れない」と言った。膨れた所に熱はなく、水が溜まっているようだった。よく見ると皮膚に直径五ミリ位の、丸く透き通った所が二箇所あった。弓子は素子に、様子を伝えて処置の方法を教わった。素子はこどもなげに言った。

「透けとる皮膚に、ピンセットを突っ込んで、中のガラスを引き出してよ」

弓子が面食らっていると、
「なにぼんやりしとるの、透けとる皮膚にピンセットを突っ込めば、皮膚は破れるでしょうが、行列ができとるのに、もたもたしてからに」

弓子は勇気を奮って、透明な皮膚の真ん中にピンセットの先を付き刺した。下に当てる置いて置いた消毒布の上に、どぶりと水が出た。弓子はピンセットの先を進めた。ガラスの破片にピンセットの先が当たって、カチカチ鳴るのを指先に感じた。弓子は指先の震えに気付いた。弓子は左の指先で外から中のガラス片を支え、右手のピンセットでしっかりとガラス片を挟み込むと、むりやり引き出した。径五ミリの皮膚の口は大きく広がり、ガラス片は無事に出た。ガ

やって見たが、あんまり違わんのんじゃ、何かええ工夫はないもんじゃろうかのう」

またある日には、遺体の物らしい踵の骨を、野犬が啜えて走っていた、と言う話を聞いた。安川の河原の火葬の跡を、戦災で急増した野犬が漁るのだった。

毎日十人を超す死者が出て、火葬係の橋口の目は窪んでいた。炎天下、蛆のこぼれる遺体を筵でくるみ、村民と共に抱え上げて農耕用の荷車に積み、日に何度も安川の河原へ運んで焼くのがあった。七日以来乗重傷者の死が相次いで、やり切れない日々が続いた。

収容所では始めのうち、蠅を防ぐために、限られた窓しか開けなかった。結核を患って日の浅い弓子は、罹災者の看護を始めるにすぐに体調を崩し、吐き気や下痢、食欲不振が始まった。次第に同僚や他の収容所の職員にも同じ症状が現れて、窓の全開と、働いている者に戸外での深呼吸が課せられた。収容所の換気は、治療する術のなかった罹災者にとって、唯一の治療法だったかも知れない。しかしその結果、農村の逞しい蠅は自由に入入りして、追う者のいない夜の間に、力尽きた負傷者の火傷の傷口に蛆を育てた。くす玉のように火傷の傷口にぎっしり並んだ蛆は素早く潜り込んで、ピンセットで挟み取れるような状態ではなかった。

ラス片を引き出す時、当然切れたはずの皮膚の口から出血がなかった。血が滲むと言うこともなかった。弓子はそれが異常に感じられていつまでも心に残った。五日間もお爺さんの首の中の体液に浸かっていた先の尖ったガラス片には、一点の曇りもなく、弓子がむりやり引き出したピンセットの先で、輝いていた。お爺さんは喜び、感動した弓子に見せに行った。

「そんなもん、見せにこんでもええ、もつと中を探しんさい、まだ中にあるはずじゃ」

弓子はもう一つの透明な皮膚を破って二個、併せて三個のガラス片を取り出した時、震えが止まった。お爺さんは涙を拭きながら、何度も頭を下げ、弓子は乾き切った口から声も出せなかった。素子が、お爺さんを連れて郷里へ帰る娘さんの後姿へ、

「くにへ帰られたら、かならず、お医者さんに診て貰うて下さいねえ」

と声を掛けていた。弓子は出血を見ないことが気になっていたのに言えなかった。

ある日、弓子は役場で、火葬係の橋口が話すのを聞いていた。

「薪を節約するのに、濡れた筵を被せたらええ言うけえ、

廊下の足音が病室の入口で止まり、看護婦の声がした。

「お熱、計ってありますね、見せて下さい」

弓子は慌てて、ベッドの枕頭に付いているサックから、電子体温計なるものを抜き出して脇に挟んだ。入口で看護婦が聞いていた。

「お通じは何回、お小水は」

「四人目が弓子の番だった」

「お熱、計ってありますね」

「はいはい」

「お脈を」

「はいはい」

「お休みに、なれましたか」

とんでもございません、みず、ちょうだい、の連呼がございまして、とは、弓子は言わなかった。ご存じないはずはないと思つて……。

「おかげさまで」

「昨日は、脇の痛み、いかがでしたか」

「痛みましたし、熱も出ていたようです」

「つらい時には、おっしゃってください」

「よろしくお願いたします」

最後に、お通じと、お小水の回数を聞かれて、

「お大事に」

「ありがとうございます」

あの時の状況では、重傷者を国民学校へ収容した、と言うだけのことしかできなかった。医者がいない、薬がない、ガーゼも脱脂綿も包帯もない、あの時の胸を搾るような切なさ、弓子は三十年たった今も、あの状態を思い起こすと、大声を上げて泣きたくなるのだ。弓子がお爺さんの首筋からガラス片を取り出した時、たまっていた水は出たが、出血はなかった。弓子はお爺さんが、娘さんと共に郷里へ向かうのを見送った後も、ずっとそのことが気になっていた。それでなおさら、お爺さんのことが忘れられないのかも知れない。弓子はあの時、物凄いスピードでガラス片が食い込んだ瞬間に、皮膚が口を塞ぎ、ガラス片を飲み込んでしまった事実を知った。そしてその爆風の凄まじさに恐怖を感じた。お爺さんはもう生きてはおられないだろう、弓子は病院の、寝心地のいいベッドにいることに、後ろめたさを感じながら、あの時のお爺さんの笑顔を思い、必死だった当事を思い起こしていた。

朝食前にお茶が配られた。弓子はまた湯飲みを借りた。夫は電話口で風邪だから届けられないと言った。

タカさんは食事の手を付けなかった。右の窓際のベッドにいる上田さんは、弓子より一日早く入院した手術待ちの患者だった。上田さんは食べようとしないうたタカさんを心配

せた。そしてある朝、小学校前の、「いで」と呼ぶ灌漑用水の流れに浸かっている所を、見付けた吏員に連れ戻され、間もなく亡くなった。遺体の全身の皮膚に、小豆粒大の皮下出血の斑点が並んでいた。

収容所に、家族を探しにきた年配の水兵がいた。幸い奥の部屋にその人の妻と娘がいて、巡り合うことができた。

「呉の海兵団にいて、三日の休暇を貰って捜し歩き、今日が最後の一日でした。巡り合えて幸運でした。見舞いに砂糖を貰ってきましたから、枕元に置いて行きます。飲ませてください。あなた方も召し上がってください」

そう言って、敬礼をして、年配の水兵は帰って行った。そのすぐ後で、弓子はその親子に聞いて、飲みたい、と言う砂糖水を作って飲ました。それがもう夕方だったので、弓子は砂糖の包みを親子の枕元に置いて叔父の家に帰った。次の朝、親子の枕元に砂糖の包みがなかった。盗まれたのである。家に鍵を掛ける習慣もなかった、その頃のその村で、死にかけている重傷者の砂糖を盗んだ者がいた。下痢が続いていたその親子も、間もなく亡くなった。

ある日収容所に、広島で罹災した川内村の高校生が、リヤカーで運ばれてきた。その高校生の耳の穴に蛆がいて、「痛がるから何とかして欲しい」

して、タカさんの口へ、一匙の粥を入れてあげた。ところがタカさんはその粥を舌で押し出して、寝巻の胸を汚してしまった。

「仕方がない人だねえ」

とその胸元を拭いている上田さんに、タカさんが言った。「余計な世話を焼くからだよ」

収容所の罹災者は一階の中程の二教室と、出口の二教室とを埋めて足らず、遅れた入所者は二階の教室に寝て貰うことになった。女子職員は役場の仕事を放り出した状態で重傷者の側にいた。しかし見守るだけでなす術がなかった。村の主婦が交替で食事の支度をした。

避難してきた人の中に若い妊婦がいた。ショックで陣痛が始まり、妊婦を預かった農家の出産経験者の主婦と、保健婦の素子が出産を助けた。子供が無事に生まれて間もなく、母子共に亡くなってしまった。

収容所にいたタバコ屋のおばさんは、肩に焼肉風の小さな火傷があるだけだった。しかし苦しみ方が激しく、遂には気が狂い、外から持ち込んだ竹竿で、夜通し天井を突き上げて騒いだ。一日中、いたい、いたい、と叫びながら、女子職員の後を付き歩き、絶え間なく肩の火傷に薬を塗ら

と連れてきた母親が言った。弓子は耳に掌を被せて暗くして見たり、コヨリをちらつかせたりして、蛆を耳の穴の口へ引き出す努力をした。しかし蛆は、弓子が何もしていない時に、ふと穴から顔を覗かすのだった。そして弓子が、構えていた右手のピンセットで、挟もうとする瞬間にはもういなかった。蛆が隠れると、高校生が悲鳴を上げた。弓子にも、周りの者にも、他にこれと言う知恵が思い浮かばなかった。弓子は必死で左手を被せ、右手で捕らえる作業を繰り返した。いま思えば、その時の弓子は蛆にからかわれている状態であり、蛆と戯れている図に見えたかも知れない。やがて母親が、

「もういい」

と言い、痛がる息子を連れて帰った。収容所の窓を開放してからは、蠅の出入を防ぐ手立てはなかった。農村の遅い蠅は重傷者の傷口でしたたかに蛆を育てた。しかし傷のない所で蛆は育たなかった。弓子は高校生の耳の中の傷の存在が気になった。しかし耳鼻科医不在ではどうすることもできなかった。

収容所の奥の教室に、若い夫婦と子供三人の家族がいた。五人とも火傷はなく、ガラスによる裂傷だけだった。特に赤児の下唇の裂傷が問題だった。乳首に吸い付くことができず、母親が流し込んだお乳も殆ど飲み込めなかった。そ

のうちに母親のお乳が出なくなつた。罹災者に粥と新鮮な野菜は充分出されていた。当時、それは焼け出された疎開者の食事より、いい食事だった。初め元気そうに見えた人たちも二、三日経つと口の周りに発疹が出て下痢が始まつた。医者も薬もない収容所では不術がなかった。裂傷がなかった母親も下痢が始まり、下痢が始まつた母親にお乳が出せるはずがなかった。

父親の、ガラスによる裂傷は肩から背に集中して十二、三箇所。子供二人の裂傷は背を中心に五、六箇所。三人の手当では素子以外に手の出せる者はなかった。父親と十歳と五歳前後の二人の男の子は、シャツを着て帽子を被っていた。シャツの上から突き刺さつたガラス片が背に至っている。素子が言つた。素子はシャツの背中の部分を切り取つてから治療を始めた。ガラス片を抜き取つた傷口は皆口を開いたまま、血の気のない白っぽい肉を覗かせて、三人の肩や背に並んでいた。出血するでもなく、化膿するでもなく、肉が盛り上がる気配もなく、その傷は縁が黒ずんでいく。それは赤児の唇の裂傷も同じだった。子供二人と父親が先に逝き、傷がなかった母親が最後だった。母親は夜中に亡くなつた赤児を膝に、教室の腰板にもたれて足を投げ出した格好で明け方に亡くなつた。

弓子の脇腹の痛みは、入院した翌日の午後から始まつた。

目を移すと、ベッドの左側に吊られた点滴の向うに、窓越しの空があつた。雲のない空の、すぐ近くには雑然としたアパートの裏側が見えていた。その先の、少し離れたビルのガラス窓が、まだ高い太陽から受ける灼熱の日差しを跳ね返していた。境のカーテンが壁際まで開けられていて、その際から、ベッドの上体を少し起こされているタカさんの、窓に向いている斜めの顔が見えていた。弓子は寝たきりのタカさんが、窓へ向かう気持を思いながら、その姿を見ていた。弓子はタカさんの断固として食べようとしない姿勢が、寝たきりのタカさんのままならない日常の、唯一の自己主張ではないかと思つた。ふと、タカさんの口が動いて、

「おそいなあ」

と呟いた。弓子は、呟いたタカさんの姿から張り詰めていたものが消えて、寂しそうな影が漂うのを感じた。ひよつとするとタカさんは、もう長くないのかも知れない、弓子の胸をそんな思いがよぎつた。弓子の点滴が終つても、まだ小柄なタカさんは肩を落としたまま、ずっと窓に向かつていた。

夕方、タカさんの所に、息子夫婦と孫娘二人の見舞いがあつた。タカさんの「おそいなあ」は、息子たちの見舞いを待ちかねた溜息だった。面会中に食事が運ばれたが、タ

点滴の治療で確実に薄れていき、入院六日目の夜には、痛みを感じなくなつていった。弓子は痛みが薄らぐにつれて、タカさんの「みず、ちょうだい」にも、ほどほどに付き合つたし、看護婦とも近い退院を意識した気楽な付き合いが始まつていた。

入院六日目の早朝、検査用の採血にきた看護婦が言つた。「北島さん、血を少しばかり、いただきたいのですけど」

「どうぞどうぞ、ご遠慮なく」

採血も、これが最後だと思つた。弓子は機嫌がよかつた。その看護婦は、弓子の採血が初めてだった。

「どちらの腕が、いいのかしら」

「太つてるから、右腕のこの血管だけが頼りでね」

「助かります、ちよつと、痛いけど、ごめんさい」

看護婦が帰りがけに、

「この頃は太つてる、なんて言わないのですよ、私フクヨカだからつて、言うんです」

その時隣のベッドから、タカさんの鋭い声が飛んだ。

「ちゃらちゃらふざけやがつて、ためえら、がきんこじゃねえか」

タカさんは叫んだ後、眠つた振りをしていった。

その日の午後、弓子はベッドに寝て、毎日その時間に行われる点滴の、透明な液体が中程まで入っているガラス瓶の底から一滴ずつ、輝きながら落ちる雫をしばらく見てい

かさんは食べなかつた。隣で食べている弓子を見て、

「あんた、よく食べられていいねえ」

とタカさんはからかう調子で言つた。弓子はこの時から、タカさんが気力だけで持ちこたえているのを感じるようになった。タカさんが夜昼なしに叫ぶ、「みず、ちょうだい」も抑圧への反発に思えなくもなかつた。タカさんの見舞いに来た下の孫娘は、じつとしていられなくて、度々面会用の丸椅子を倒した。タカさんのベッドの裾のパイプを、踏んでは跳ねるその子のワンピースの裾は、いつも乱れて揺れていた。弓子は罹災者を看ていた弓子の側で、いつも揺れていた同じようなスカートを思い出し出していた。

「何年生？」

と弓子は、タカさんの孫娘に聞いた。

「一年生」

と孫娘は答えた。

同い年だわ、と弓子は収容所にいたエッコちゃんの姿を思い浮かべた。

エッコちゃんは、罹災者が収容所に入居した日、収容所の表に立っていた。弓子が、

「一人できたの」

と聞くと、黙つてうなずいた。

「お父さんやお母さんは」

と聞くと、

「わからない」

と言った。

「お名前は」

「エツコちゃん」

それだけしか話せなかった。両親の名前も首を左右に振るだけだった。素子も弓子も、両親にはぐれたに違いないと思つた。タカさんの孫娘より痩せていて細い顔をしていた。エツコちゃんは着ていたワンピースも破れていなかったし、怪我もなかった。女子職員の弓子や素子たちの周りを飛び跳ねていて、役場にも付いてきた。弓子たちは皆その子の親が捜しにくるのを心待ちにしていた。その子だけは元氣になつてくれると、素子も弓子も思つていた。弓子たちを、

「お姉ちゃん」

と呼んで、朝は、収容所の外へ迎えに出ていた。一度も無理を言わず、おとなしく粥をすすり、好き嫌いも言わなかった。痛いとも苦しいとも言わないまま、元氣がなくなつて下痢が始まり、三日目には亡くなった。弓子たちは、エツコちゃんに、全く何もしてやれなかった。

弓子は、タカさんの孫娘からは、とうに目を放し、天井を向いて目を閉じていた。眼裏にはまだ揺れるスカートの残影があつた。

ヨックは、今も心に残っている。弓子はその時、働き手の父や夫や、母や妻を突然に失つた隊員の遺族の暗澹とした思いは理解できた。やり場のない氣持もわかつていた。しかしあの時代を、働き手を失つた農家の遺族が生きて行くには、一人生還した村長に、食つて掛かる位の氣概が必要だと、思つてあげる程の理解はなかった。それで弓子は、同じ被害者である村長を責めるより、そんな事態を作つた戦争を憎むべきだと思ひ続けた。そしてこんな時に、一人でも助かつた者がいてよかつたと、思えないことを、悲しんだのだつた。その時が村長との別れだった。村長も、間もなく逝かれたのである。

収容所には入らず、農家の納屋で暮していた母と娘の罹災者がいた。弓子は役場への行き帰りに出會つて、初めはただの疎開者だと思つていた。そのうちに、二人の頭髮が透けてきて罹災者だと解つた。ある朝、しばらく會わなかつた二人に、土手の道で擦れ違つて會釈した。髪の毛がすっかり抜けて二人とも丸坊主になつていた。特に若い娘が、赤い柄の浴衣を着ていたのが痛ましく思えて心に残つた。

その昼、役場で弁当を食べていた弓子は、その母と娘が太田川へ身投げした噂を聞いた。弓子と擦れ違つた直後の身投げである。幸い村の舟ですぐに助け上げられて無事だった。広島市に近い川内村は農村の因習を感じさせない村だ

義勇隊の二百人は全滅だった。自宅へ連れ帰ることができた七名も、相次いで亡くなった。全滅した義勇隊の中に一人だけ生還者がいた。爆彈の投下時に、打ち合わせのために建物の中にいた村長には怪我がなかった。弓子は役場に勤めていながら、村長だけ無事に帰っていることを知らなかつた。隊長一人の生還は、隊員の遺族の事前、公表できなかつたのかも知れなかつた。

そんなある日、村長が役場にきて、突然吏員に別れを告げたのだつた。村長はその頃、もう半分近く白髪で若くはなかつた。しかし小柄な引き締まつた体で、義勇隊の引率をするくらい元氣だつた。ところがその日の村長は、品のよい顔立ちの色艶も冴えず、沈んだ面持ちだつた。

「引率者の私が、一人無事に帰つてきて、亡くなった隊員や遺族に申し訳がない。私の家の前で唾を吐かれる人もある。死ねばいい、と私も思うが、さて空襲警報となると、お恥かしい話だが、私は夢中で避難している。しかし私も、ご覧のように（村長は指先で髪の毛を摘まんで見せた、すると摘まんだ髪の毛がぼそつと抜けた）髪の毛が抜け始めた。いずれ長くはないと思うが、この村では養生もしにくい、医者になつていてる教え子を頼つて離村しようと思う。後のことをよろしくお願いする」

弓子は村長を尊敬していて、離村の事情を聞いた時のシつた。それで弓子は二人の身投げが、疎開者としての事情ではなく、罹災後の症状に対する不安や恐怖だろうと、身投げの理由を推察した。当時ピカドンの症状や治療について、医者さえ何も知らなかつた。罹災者の不安や恐怖は計り知れないものだった。二十歳の弓子にさえ、罹災者の火傷が普通の火傷の治り方ではなく、ガラスによる裂傷の治り具合が普通ではないことぐらいわかつていた。弓子は次第に、肉が盛り上がらずに口を開けたまま、出血もなく、膿むこともなく、縁が黒ずんでくる裂傷に、そして水のよくな下痢、抜ける頭髮、体液ばかり沁み出してくる火傷などの異常な症状に、効果を上げる薬があるとは思えなくなつていた。弓子の知識では、傷口の消毒が完璧なら自然に火傷には新しい皮膚が張り、傷は肉が盛り上がって治るはずのものだった。収容所を開くまでの五日間に、重傷者の大方は亡くなつていた。収容所を開いた時、七十人近かつた罹災者の数は、四、五日の間に二十人を割つていた。

八月十五日の朝、弓子は役場で吏員たちの話から、その日の正午にラジオで重大放送があることを知つた。弓子はその朝、おじさんの家のラジオを聞かないで出勤したのだつた。重大放送についての吏員の意見は沈みがちで、いよいよ本土決戦だと言う悲壯な思い入れが、口を重たくしているようだった。しかし弓子は密かに戦争の終りを感じて

いた。

弓子は重大放送を、役場の用を足しに帰った熊吉おじさんの家で聞いた。時々掌で叩いて、活を入れながら聞く、古いラジオはピーピー鳴るし、天皇陛下のお声はぼそぼそして、弓子にはよく聞き取れず、訳が解らなかった。放送が終って、しばらく黙って目を閉じていた熊吉おじさんが、目を開けて、

「戦争は終わった。無条件降伏じゃ」

と言った。弓子には無条件降伏が、どんな事態をもたらすものなのか、見当も付かなかった。しかしそのお陰で空襲がなくなり、明かりを点して食事ができるようになった。店の明かりが土手の道をも照らして、夕涼みの縁台が出されるようにもなった。やがて復員した若者たちがアコードオンを抱えた青年を囲んで、リンゴの歌を歌いながら、夕暮れの土手をそぞろ歩くようにもなった。その頃弓子は、夕方に出てくる微熱に気付いていた。

「タカさん」

弓子は首を回して隣のベッドへ声を掛けた。

横目で枕頭台の花を見ていたタカさんは、弓子へ目を向けた。

「タカさんは、とし、いくつ」

「七十五」

「そうだね、少しずつでも、食べるかね」

その夕方、タカさんは嫌っていた入歯をはめて、少しずつ食べることを始めた。

弓子は次の日、入院して八日目に退院の許可が降りて、午後から荷物をまとめ始めた。

「寂しくなるよ」

とタカさんが言った。

「大丈夫、代わりの患者がすぐにくるから」

「そうだね」

「ちゃんとブザーを鳴らして、看護婦さんから、水ももらってね、いくら飲んだのか、看護婦さんにわからないから、私はもう代りに連絡してあげられないよ」

「わかったよ」

看護婦がきて、弓子に手帳を渡しながら、

「はい、被爆手帳と保険証、貴重な物を長々とお預かり致しまして」

「あの人は、いつもあんな言い方をする人だよ」

と珍しくタカさんが言訳をした。弓子は笑って、

「いいの、もう帰るんだもの」

「それよりも、あんた被爆者？」

「いや、看護しただけ、近くにいたからね」

「私の亭主は、広島の駅でやられたね、ちよとど汽車が止

「まだ若いんだ」

「わかかないよう」

「百歳おめでとうって、言われてる人から見れば、ずっと若いよ、そんな人、今いっぱいいるんだからね……、元気だ」

「でた」

「すぐにてで、すぐに引つ込むんだ」

「引つ込まないね、ずっと出てるよ、あんた面白い人だからさ」

「タカさんのお子さんは、この間見えた人だけなのかな」

「いや、男三人、女三人、それがみな、この近くにいるから寂しくないよ、この間きたのは次男だよ」

「うらやましいなあ、だけど六人もいちゃ、戦争中も、戦後も大変だったんだ」

「そうだね、大変なんてもんじゃ、なかったね」

「元氣だして、帰らなくっちゃねっ、タカさん」

「寝ててさ、オシッコ漏らすようになっちゃ、おしまいだよ」

「だけど病気の方は、もういいんですってね、だったら、便所まで歩いたら、それでいいんじゃないの、リハビリの先生も、見えてることだし」

「そういえば、そうだね」

「食べなくっちゃ、歩けないよ」

まっついてさ

瞬間、弓子は言葉を失った。しばらくして弓子は、

「そういうことも、あったんだ」

と弓子自身に言い聞かせるように言った。

「下の子は三歳だったね」

「ひどいもんですねえ……」

「ひどいもんだよう、毎年亭主の命日に、家族が集まるんだけど、今年は私がこんな始末だから、次男がきたのさ」

そう言われれば、あの日が八月六日だったのだと、弓子はタカさんが「遅いなあ」と、溜息をついていた目を思い起こした。

弓子はそれから、少しばかりの荷物をまとめ終わるとまたベッドに入った。そして冷房の効いている部屋の、寝心地のいいベッドの上で軽い布団を掛け、水色のパジャマを着て横たわっている今の自分を思った。あの頃に、こんな日がくることを誰が予想しただろうか。弓子は、原爆で夫を失ったタカさんに対しても、まだ当分は退院できそうにないタカさんに対しても、何か話さなくてはいらなかった。それでまた隣へ声を掛けた。

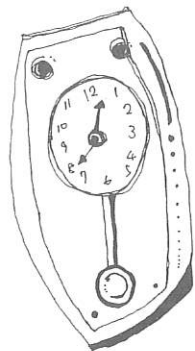
「タカさんは、ご主人を探しに行かれたの」

「無理だったね。代わりに運送店に勤めていた亭主の弟が、私の弟を連れて車で探しに行ってくれたんだ」

「よかったですねえ」

突然タカさんの声が変わった。「よかないんだよう、私は見たかったさ、ハリネズミのうになったあの人を見て、大声で泣いてやりたかったさ」弓子は突然の怒り声に驚き、とんでもない話題を持ち出した後悔に唇を噛み、押し黙った。「爆風で割られた汽車の窓ガラスが食い込んで、亭主はハリネズミのようになって死んでいたってさ、真夏だろ、二人が見付けた時にはもう臭っていて、連れて帰ってすぐ火葬にしたってさ、私が見たのは遺骨だけ、私が見る亭主の遺骨には、いつ見ても、一緒に焼かれたガラス片の、融けた塊が貼り付き、絡み付いているって始末なのさあ」

タカさんの思い掛けなかった反応に、胸の潰れた弓子は、血を吐くようなタカさんの言葉を聞き、涙を拭いながら、静かにベッドの周りのカーテンを引き、帰るための着替えを始めた。



自費出版承ります

文芸思潮 出版部

あなたが残したい本、形にしたい本作りに協力します。文芸思潮編集部がアドバイスして、最良の本を作ります。

心に残る本を

200P 500部

ハードカバー

80万円上製本 並製 65万円

詩集 100P 50万円 ご相談に応じます

文芸思潮出版部へお電話ください。

TEL03-5706-7848 五十嵐・池田・里見まで

詩集

村地蔵へのレクイエム

和田利孝

アジア文化社

1000円

受賞の言葉

森崎房枝

森崎房枝

もりさき ふさえ

1925 広島県呉市生まれ

県立呉高女在学中肋膜炎で休学

44 呉海軍水交社へ勤務

45 罹災、川内村役場へ勤務

被爆者の看護で微熱再発、上京

49 結核性右脇下リンパ腺炎

56 洋裁学院を肺浸潤で退職

59 結婚。

67 腰椎カリエス

75 骨移植手術、アパート経営

2006 一人暮らし

東京都杉並区在住



私が被爆手帳の交付を受けたのは、昭和五十二年の五月でした。昭和二十年八月に被爆者の看護をした仲間の勧めと証明があつての申請と交付でした。その時から、私の胸に、原爆が落とされた時、私が目にしたことを書き残したいと思う気持ちが強くなりました。ことに幼い子供たちの無惨な死を告げたい思いに駆られました。二度とこんな残酷な殺人はどんな事情があつても許されぬことだと思いました。まだ命が終つてない人の体の火傷に蛆が生きている。ガラスによる裂傷から出血もなく化膿するでもなく新しい皮膚が張るでもなく縁から黒ずんでいくのは、命が尽きる前に腐敗が始まったのか、それからすぐに死が訪れる。しかし私にはそんな残酷な記憶を書き込む力がなく、余りの辛さに心が離れてしまい、いつも淡々とした記録になってしまうのでした。その繰り返しから、この度抜け出すことが出来たのは、ある人のご指導のお陰でありました。つたない私の小さな作品であります。原爆廃止のお役に立てばこんな嬉しいことはありません。念願が叶った上に、栄えある賞を頂き、心より嬉しく厚くお礼を申し上げます。有難うございました。

ワンスインマイライフ

二宮英郷 えいごう

悲壮な電話が入り、姪ひまの大学院の学費を捻出することを約束し、思案の日々を送っていた。

英樹は立った。窓を開ける。冬の光が天空に満ち銀色の光の幕が一面、勢いをつけて迫ってきた。冷気が鼻腔に侵入してきた。朝一番の新鮮な空気を吸い込んで、肺の底に沈殿している淀みを吐き飛ばした。寒風が首筋を締め付ける。東京タワーが空を刺している。と、鳩の鳴き声が右斜め階上から聞こえて来た。ときかを飾る雀鳩の雑種だ。紫色の胸毛が風で凹凸に揺れている。「ハロー」と声をかけた左のベランダを見ると、手すりにこちらを見ているガラスと目が合う。背景に氷川神社の常緑樹の頭が見える。毎週水曜日は夜七時三〇分から咲子の英語の個人指導日

明治通りに面して建造されたマンションの六階を購入し、六畳間の出窓に面して両方の壁際に横長の机を置き、真ん中に椅子を置いて仕事部屋とした。調べ物をして一段落着くと、座ったまま一八〇度回転してパソコンを必要とする仕事を始める。目の上、壁に「ABOUT・FACE」と貼っておく。「回れ右」という意味だ。騒音は、道路から離れているので静かであったが、どうかすると気になった。それで出窓の内側にガラスを一枚加え、ガラス、カーテン、ガラス、カーテンとした。自室が深閑となった。松岡英樹ひできは、妹から「これ以上頑張れない、助けて」と

だ。その日、出講先からの帰路、武蔵野線全駅で電車が停止するとのアナウンスがあった。「只今、レスキュー隊がお客様を線路から引き上げている作業中です……」乗客へ迷惑を掛けている謝罪と情報と頻繁に流していた。英樹は目を瞑ったまま、脛の上皮を浸透する明かりを感じながら「死んじやだめだよ」と自らに言い聞かせた。咲子に事故の報告はせず、仕事で遅れるとメールを送信した。

「先生、漱石の『こゝろ』の感想文、提出なの。書いたら読んでくださる。……私アメリカへ行きたい。ハーフの子供を産みたい」

「ほほ、それはいい。あんたはヒップが国際級だから、ぼろぼろ赤ちゃんができるよ。可愛いよな。電車の中で赤ん坊が母親におんぶされ一人前にこつちを見るの。盗みたくなっちゃうよ。ねえ、たくさんつくって、一匹頂戴。大切に育てるから……。アメリカ？　まず大学入ってからにしないさ。そうじゃないと、日本語がおかしくなるよ。」

アメリカの男は、いい女がいたら、口説かないと失礼だというDNAをもっている。咲子は清らかで麗しい。あんたはセックスアピールが匂い出てるよ。ピカソはデッサンをバンバン描いた。朝から晩まで立って仕事をしていたぞうだ。多作のなかから名作が生まれる。『源氏物語』を模範とするの。本を何冊読んでも賢くはならないよ。ひとつ

の恋は万卷の書に勝る。漱石、面白い？」

「読み始まったばかり、鎌倉の由比ヶ浜で西洋人と先生が沖まで泳ぐところ——までです。MARCHE明倫高等学校中法数教を見てきました。慶應に入りた。慶應の英語は半端じゃない。成蹊のキャンパスの雰囲気が好き。成蹊の法学部へ行きたい。東京女子大にしようかな。青学は嫌だ。家から近すぎるんだもの」

「そうですか。慶應？　大丈夫だよ。やれよ。あんたは記憶力がまじ優れているから。英語は暗記の一言。東大の数学だって暗記の作文。あんな問題、現場で解こうとしてもできっこない。パターンが決まっている。暗記したことを試験場で作文すれば合格。肝心なことは今までと同じく学校の授業を『復習』と位置づけるの。高一、高二の『クラウン』を最後まで暗記したから、先生よりあんたの方が英語はできることが証明できた。な。わかった。あとは三年のクラウンを暗記すればアメリカ留学なんてちよろいちょろい。レポート提出で英語が思いのままに書ける。咲子はTOEFLで550は取れるはず、後々、スチューデント・ビザに必要だから、受けておきなさい。でもさ、一番肝心なことは学費が払えること——すべてはカネだ。と頭に刻んでおくべし」

「朗読するいい教科書ないかしら」

「参考書は一冊。浮気しない。いままでのようにクラウン

のCDで勝負。学問の基本は『読み書きパソコン、なんでも三回』……読みは継続して音声学を取り入れる。さあ、割り箸、はい。銜くわえて、ストップウォッチを持って、イヤホンから聞きながら同時に口で発声する。全部丸暗記だ。おっぱじめよう。いいかい、あんたの『目標の木』は高
一から高三の教科書を丸暗記することのみ。あとは根元周
辺に『努力の水』を注ぐの。あつち、こつちにランダムに
努力の水をかける浪費をしない。英語ができれば大学はな
んとでもなる。慶應合格。それから好きなアメリカの歌を
二、三曲覚えておくの」

「先生、外人と恋したことあるの」

「あるよ。初めて女の子を知ったの二十三歳のときだ。当時アメリカにいて、日曜日に教会に行つて、小学生と一緒にバイブルスクールで勉強していた。その先生がとことんいい人なの。ああいう女を天使っていうんだろうな。三〇歳をちょっと超えていた。ランチに何度か自宅に招待されてごちそうになり、目の前で揺れる生き物を見ていると、激情が走つて、猛烈に攻撃した……。それから、びっくりした。たまきんキスしてくれたんだ。先生はあたしの頭を両手で押さえて……。先生のヘアが顎、唇、鼻、頬、目、額を愛撫してくれるんだ。返礼をしないと国際儀典に反するだろ、日本男児の恥辱の極みだろ。ところでこの絵を見るよ。見るたびに思う。ピカソはすごい男だ」

耳の底で聞きながら——咲子、そりゃすごいぞ。

ここ自室であんたのヘアを想像して気持ちよく酔ったまま鑑識眼を磨いている」

「わああ、素敵。先生、連れて行って」

「お母さんに怒られちゃうよ」

「だいじょうぶ。母は昔、暴走族の番長だったの、父が子分だったんですって。番長と子分が結婚して会社を設立したの。でも両親のビジネスやばいかも。広告代理店の子会社だから、仕事が少なくなつて。母つたら、結婚前、今は偉くなつてNHKの番組に名前が出てますが、そのひとにプロポーズされたんですって。ぴんと来なくて、振つたんですって。母は、男運が悪いの。父の苗字が珍しいでしょ
『宇神』だから。で、ね、そのNHKさん、地元の同級生から聞き出したのでしょうね、結婚してからも電話してきてストーカーされたんですって」

「まさしくそれが恋だよ。男は惚れたらストーカーになる。ならなかったらそんな恋は気合がはいってない。あんた、最近、とみに綺麗になつたけど、彼氏できたの」

「できませんよ。だって、電車通学じゃないし。女子高だし。でもね。父が『まだ彼氏できないのか』って母に聞くんですって。で、ね、面倒くさいから、母には曖昧に報告しているの。そしたら元番長サン、何と戦略を打ってきたと思います?」

咲子はかすかに笑顔を浮かべて頷いていた。

「ピカソのエッチング?」

「まさしく。『セレスティース』(La Celestine) 400枚の349だ。咲子、鑑識眼が鋭いな。この半獣の男のたくましく下半身と、女の色香が噴出している黒光している生き物を見てみる。足元真中で犬が座っている。真っ白スピツツかな。こつちをじつと見詰めている。目がきれい。私の主人の裸を見てください、とわれわれ鑑賞者に訴えている目だ。天才の描いた女のヘアを独り占めするため、思い切つて買った。あたしの宝物だ」

「先生、これ、宮沢りえと、樋口可南子のヌード写真集でしょう」

「男は幾つになつても、予期せずふうと欲望の鳥が飛んでくるの。この星で一番綺麗なものは女の体だ。男は鑑賞と賞讃をすることが義務付けられている。チョコレートとシーバシリガルを舌舐めずりしながら、自室で寛ぐことを無上の喜びとしている。

十二月三十一日、横浜のホテルに泊まる。部屋から、綺羅星を見上げ、海原に浮かぶ満天の星を見下ろしているとカウントダウンが始まる。……ファイブ、フォオ、スリー、トゥー、ワンス、新年だーあ……。雄鶏が閨むすこの声をあげる。その瞬間。横浜港に停泊している船、船、船が一斉に汽笛を鳴らすんだ。船が思いつきり吠えるんだ。その鳴き声を

「あたしは、自分の子供を作ったことないからなあ」

「『あんたの体は結婚するまで私の体だからね。自分の体、傷つけたら許さないからね』だそうです。まいつちやった。黙つて、手渡すの。何だと思います」

「防衛兵器……」

「そう、コンドーム」

「いいお母さんだ。アメリカの友人が言つた。ある高校では親の同意を取つてペニスのモデルで練習するんだって。やつてくれますね。あんた法学部へいくんだろ。ならば企業で出世する。なぜか? 『国の営み、人は何をすれば気が済むか。何をしてはいけないか』の規範を学習する。交
通法規を知っているから『企業という車』を運転できるからだ」

「外資系の会社に入りたい」

「本社からの出向ネイティブは自国で『セクハラ教育』を徹底して受けるから、恋は豊作というわけにはいかない。なにしろ『綺麗なヒップだね』と言っただけで訴訟だとか。勘弁してよ。言わずもがな、日本の男も本能と両腕もぎ取られて礼儀正しく会社勤めしている。ああ、嫌だ、やだ」

「先生、外人の友達いない?」

「大きな仕事をしたかったら、咲子なら国家公務員Ⅱ種は合格できる。世界にある日本大使館で仕事をしなさい。年がら年中、赴任先の大使館でレセプション。お返しに招待

する。国益を踏まえてお喋りすることが仕事。大使にはなれないけど総領事にまではなれる。大学に入ったらすぐ公務員専門の予備校へ行きな。外資系なんぞ氷の館だ」

「でも、父が体調くずしてるとんです。この間、日曜日ね、父が豊で七転八倒したの。『俺は死ぬー』って、胸を押さえて。キッチンにいた母から庖丁を奪おうとしたの。母は泣きながら『何いつてるんですか。一生懸命やっただんすから。パパの責任じゃないでしょう。やめてください。咲子！ お父さんを押さえない』ちょうど、高二の弟が帰ってきて、『親父、何やってんだ』って羽交い絞めにしたら、父ったら動けなくなっちゃった」

「だったら、即戦力だ。あんたの美しい体で人生を勝負しなさい。女優にならなさい。その『親からもらった声』で勝負してみな。マリリン・モンローは今なお愛されている。なぜだと思ふ。あの声だよ。声。男は皆とろけちゃった。そして一生涯、女優業を辞めないこと。あんたが、六〇歳になったとき、今をときめく大女優が、ほとんどあの世へ旅立ち、あんたの時代が来る」

「大学どうしよう」

「会社がやばけりゃ、もう一つの選択。国家試験に合格して両親を食べさせなければならぬ。女優になる軸をしっかりと押さえておく。三、四年の足踏みは無駄ではない。演技に人格の匂いが出てくるから」

メラマンに十八歳の記念として撮ってもらいなさい」
「度胸試し。本番まえのリハーサルに先生にお願いするかも」

「女優になつてばかばか稼ぎな。男も女もカネを稼げないのは首のないのと同じ。詩人シルレルは宣うた。人間は『一日食わざれば嘘を言い 二日食わざればものを盗む 三日食わざれば人を殺し 四日食わざれば人を食む』。凛として、女優を継続するには、柔道整復師か鍼灸師になりなさい。学費は三年で五百万。町医者のなまの整形外科なんぞ、藪だよ。レントゲン撮って鎮痛消炎湿布を処方してくれるだけ。骨が飛び出している患者はお手上げ、何にもできない。『紹介書きましよう』で、一件落着。何しろ、柔整は実入りがいい。保険が使えるから。一方、女優業で売れない時代が万に一つ来たことを想定しておく。そのときは、自分の患者を診ながら人間修行ができる。患者はストレスの塊。無性に話しかけてくる。で、ね、患者の持病の歴史が学習できる。収入源を確保。これが大切だ。ご両親の会社の規模からすれば、五百万は出る。出してくれなかったら、親子の縁を切る、と、脅かす。鬼になって今のうちに何がなんでも確保しておきなさい。いい、ちいさな親孝行、ちいさな善意は目標を壊すだけ。時給千円のアルバイトをして親を食べさせられる？ 大学を卒業しても、一人食い扶持しか養えないよ。で、ね、目の前の山を越したらニューヨ

「私より、宮沢りえと樋口可南子のほうが美しいわ」
「そりゃそうだ。なぜか？ 自分の裸体を全国にばら撒いて男に勇気を与え、女には人生を生きていく度胸を植え付けた、目に見えない付加価値を神が与えたもうたからだ」
「先生はどうして私のヌードにこだわるの」

「この二人の大女優より『原石』はあんたの方が優れている。と、信じているから。男だって老いると、若い時の自分の裸体を切り取って残しておきたいと思うものだ。このマンションを買って男としてのささやかな達成感に満たされた。だが、すぐに『いつかは必ず死ぬ』と心に津波が押し寄せてきた。耐えられなく、無常になった。俺はこの星に何も残せない。せめて自分のヌード写真を残しておこう。で、セルフタイマーで撮ったの。愛用のカメラはミノルタで高級なハンディ・カメラだ。フィルムケースに『1997年5月3日。NUDE』と書いてあるだろ。あたしの36枚のヌードが納まつてる。どこかのフォトショップで現像プリントをやってくれるところがないかなと模索しているところだ」

「先生、見たい。『ミノルタ』ってどういう意味ですか」

「実る田」

「英語じゃないんだ。その写真見て、撮影、先生にお願いするかも」

「お母さんに相談しな。女優になるって決めた。プロのカーク大学の『演劇科もしくは映画学科』に入りなさい。同級生が世界に散らばる。友だちは死ぬまで宝だ。たった一度だけ、五百万は泣いていただく。その後は両親の懐を当てにしない。ニューヨークだ。日系の柔道整復院と鍼灸院がある。アメリカで『宇神柔道整復院』を設立する希望も湧いて来る。お母さんにお願いして、女優の世界にまず、首を突っ込み、アルバイトするの」

「私、子供のころから、母の体を揉んであげたの。夏休みには農作業に疲れている山梨の祖父の体を毎日揉んであげたの。だから、向いてるかも。ヌードの話は、先生の写真を見てからにする。先生の見たい」
「ようしわかった。男と女の約束だ」

英樹と咲子は「ABOUT・FACE」の部屋を出た。「セステイヌ」を元の場所に掛けた。英樹と咲子の等身大を映している楕円の鏡の前に立つ。咲子の瞳が深く静かに艶を放してきた。

「ライブだ」英樹は裸になった。

「わお……」

「……女優になる支えとして大学、公務員Ⅱ種、柔道整復師、鍼灸師のどの道を選ぶか」

「先生……。握手したくなっちゃった。いい？」

「もちろんだ」

鏡が活写している。咲子の手は弛緩しながら動き出した

生き物に時間差で伸びてきた。

晴天。雲が浮く。校庭だ。ブルーマーを着用した女子生徒が体育の時間に逆上がり挑戦している。何度、大地を蹴っても失敗だ。やっと成功した。咲子の顔色が見るみる桃色に染まって、確かなものを心に掴んだと読み取れる両の瞳が英樹の目を射抜いてきた。英樹は身震いした。熱い鉄棒を握っているその手がしつとりして離れなかった。

二

板橋で写真研究所を営んでいる友人に「折り入って頼みがあるんだが」と電話を入れた。

英樹はシーバスを下げて土曜の午後に彼氏の事務所へ訪ねていった。

「昔、水泳部だった裸の付き合いだ。お安い御用だ」と言うが早いかプロは仕事に取り掛かった。英樹は一回りぶらぶらしてると言ってはじめて降りた駅周辺へ歩き出した。近藤勇の墓があり、賽銭に小銭を鳴らし拍手を打った。冬の寒さは夏の暑さより好きだ。英樹の体が欲していた。鯛焼きを四個、寿司屋で三人分を包んでもらい事務所に戻った。

「ところでどこもかしこも不景気だ。先生稼業はいいな。安定していて」

目標を失う」

「負けましたね。咲子さん。まじで女優になる決心をしましたね。ようしわかった」

「今度の日曜日午前中にお願います。午後は予備校の自習室へ行くから」

「一世一代のイベントだから、今日から、三日間、軽く水泳をして体に水気を含ませ、ぐっすり寝てください」

咲子は手に取った一枚を見詰めながら「はい、わかりました。これ、頂戴」と言っ、鏡の英樹の瞳に訴えた。

晴れてはいるが空が重く街に覆いかぶさっている。リビングの窓のカーテンを英樹は冷暖房省エネと消音のために二重に掛けている。雑木の葉が大小全面緑色に織られている。葉の端は灰色の線で輪郭を作っている。部屋は春のように暖かい。英樹はカーテンを開けた。光が圧倒的にリビングを支配した。曇りガラスには縦に針金が五センチ幅で補強のために埋められている。

咲子は動揺しない。冬支度を一枚一枚脱がせると、原石の裸体が露出し部屋の空気が踊り始めた。はじめて面接した高校一年から二年に時は移り、三年に成長するに従い優麗に膨らんできた「歳月の華」を、衣紋掛に掛けている気持ちになった。咲子が動くたびに被写体に当てられた光が肉に食い込み、新しい生肌へ変幻していくのがわかった。

「何いつてるんだ。少子化で小中高は閉鎖と統合、専門学
校は倒産、大学は株式会社だ。女性が生涯で赤ちゃん生む
数値は1.29だよ。恐ろしい時代になった」

「男にパワーがなくなったのよ」

「そうだな。なんだか、このごろ同窓会が多くなった」

「我ら古い先短くなったからな」と、カメラマンは酔うほどに同級生の情報をばら撒いた。「病気の話とだれそれが死んだ」話題が続いた。

「俺は軽い脳梗塞になった。発見が早かったから大分よくなった。自由に体が動かないのは本当に辛い。嫁とナニするときは、ムスコが命中できないんだ。左折しちまうんだ。年に一度、MRIで診てもらえよ」と力説する。同郷のよしみで請求しなかったが、英樹はひとこと「そういうことをしていると友情は長続きしないよ」と言っ、二万円を手渡した。「口止め料」の意味も見抜いたのだろう。気持ちよく受け取ってくれた。

「先生、わあ、赤く焼けていて、幻想的で、写実的で温かい。その乖離がとても自然でいい。夕陽の下で撮ったみたい。これなら、先生にお願いしたい。いいでしょ」

「お母さんに怒られちゃうよ。プロに頼みなよ」

「先生、言っていることと、行いが一致してない。『小善は大悪に通じ』。小さなことにこだわっていると、本来の

光の減少が肉を徘徊して影が融合し光を追いながら原石の美を脱皮させて、さらなる美へ昇華させる予感を抱かせた。女優は異なる役柄を演じ、その人物にならねばならない。美しい鼻の反対側からかすかに光の微粒子が踊り出して、顔の輪郭に淡いコロナを泳がせている。

「髪の毛に生命を吹き込もう。プロウさせて」と言うのと、咲子はカメラに背を向けて鏡に対峙した。両手を頭上に構え五本の指に髪をからませ遊ばせた。肩甲骨が浮き上がり、背骨が尻に流れ込み、足を動かすたび左右の臀部が小刻みに揺れる。

「助けて、先生。うまくいかない」英樹は背後に立った。

咲子の顔と相談しながら両耳を両手で包み、首筋を撫ぜ上げ、頭を愛撫しながら頭髪を脹らませた。

「もう少し、おっぱいの肌を生き生きさせよう」英樹は純白のハンドタオルを湿らせて再度、背後に立ち、咲子に手渡した。

「やだ、私はメイクさんじゃない」

冬の朝日は窓ガラスで均等な光に濾過され、リビングを曇らせた。プロ仕様の銀色のアンブレラの効果が出ている。英樹はハンドタオルで咲子の乳房から胸郭、肩、上腕、腹、臍を柔らかく拭くと、水気立った皮膚が生き物のよう動き出した。産毛が存在感を誇示し始めた。ASAは400だ。フラッシュは人工の光なので使わない。カメラに戻り

上半身の写真を撮る。「さあ、左を向いて『セレスティース』の男の生き物を見詰めなさい」シャッターを押した。

「咲子、おっぱい勃起させられないか」

「やだ、先生の見ている前でなんかできない……」

咲子の瞳がにじんできた。英樹は咲子の目を求めて背後に歩みより、両脇から手を滑り込ませる。咲子の目が一瞬凝固した。咲子の美を守護している自分の両手が、永遠にこの乳房に関与していくような気がしてきた。節くれ立つ五本の指が動き始めると、乳房から肉波が押し返して来る。咲子の首筋が桃色に染まり、耳が赤くなっていた。離れたいが、一回シャッターを切りに戻った。

「はい、とてもいいですよ。エクセレントですよ。今度は『セレスティース』の右側に立って正面を向いて……。そう、首だけ動かし右を見て。ピカソの絵全体を見てはいけません、何故、男と女のからだが違うのか、を考えなさい」

講師口調だ。咲子の体軀に散らばる美を、臍があたかも女王の権威を誇示し、自分の所在に集約して引き締めている。枯れた芝色のホットカーペットに冬の日の曇りが這い、佇む女のストーンと延びた両脚の丘で、艶を帯び出しかすかに揺れる黒い陽炎に、英樹はこらえ切れない欲望を抱いた。

「さあ、咲子、今度は全身を撮るぞ。もう少し、ヴィーナスの丘をふつくらさせられないか。ヘアが自然にならな全裸になった。咲子は英樹を握った。一本目のフィルムを撮り終えた。

森林のカーテンを今度は右端へ引き寄せると、曇りガラスから侵入してくる光が重みを増し縦に揺れているのに気付いた。街を覆っている騒音がおとなしくなっている。と、咲子が「先生、雪が降っている音が聞こえる」と言った。英樹はガラスドアを開けた。視界に雪が飛び込んできた。冷気が四角に侵入してきた。咲子は「わあ、綺麗！」と握ったままうれしげに言った。老人と女優の卵はしばらく天から落ちる雪景色に見とれていた。二人の全裸を雪の神だけが監視している。何人も、英樹と咲子を覗けるものはいない。東京タワーも何もかも見えない。「これは、積もるな」と英樹は言いながらガラス戸を閉めた。雪は消え、街の音を遮断した。鏡の中の咲子の鼻腔が動きはじめている。急いで三脚に戻り鼻に焦点を定め、咲子の十八歳を切り取った。

「少しづつ回れ右、はい、とまって、はい、いいですよ。回れ右」

一八〇度に位置したときに鏡の半分は咲子の左半身が見え隠れしたので、英樹はカメラを右に移動させた。鏡中の裸身と実像の競演を、呼吸を止め雨滴が落ちるようにシャッターを落した。咲子の右手はまだ空気の丸い生き物を握っている。英樹は狙いをつけて歩み寄り、咲子の手に戻した。

いか。もう少し水気をあたえ光と仲良しになったイメージだ」

「やだ、それはカメラマンの仕事……」

英樹は咲子を鏡に向かわせヘアブラシで撫ぜた。思うようにいかない。右手でプロウさせてみた。霧吹きで濡らしてみた。咲子の顔から満足の表情が浮かばない。

今日この日まで咲子の成長を見詰めてきた。個人指導を続けてきた。初対面のときに、やがてはこうなるこの思いは常時心の片隅にあった。英樹は鏡を背にしてここみ、咲子のヘアを口に含み、舌と唇でしごき始めた……。そのまま見上げると、右目に咲子の顔が歪んで両手で白髪の混じる頭を掻きまわしている姿が鏡に映っている。……徐々に毛を伝わってくる咲子の液を飲みながら自然な形を造るのを待っている。カメラに戻った英樹は、咲子の全裸から精気が露呈し気だるくそれでいて端麗なたたずまいを認めた。シャッターが切れる、かすれる音がたいそう大きく耳に伝わった。鳩が鳴き始めた。不気味な声だ。

「もっと生きている強さ、未来に向かって立ち向かう意思の喜びを体中に表現しなさい。この間、見せたあの表情だ」

「『ライブ……』の時ですか。忘れちゃった。握手しないと自然には思い出せない」

今、この時、衣服を着ていることこそ艶消しだ。英樹も

「先生、雪景色を背景にして撮りたい」

英樹はドアを大きく開けた。雪は大都会の粉塵を抱きかかえて落下している。空を清めている雪片の舞いを背景に、咲子が裸のまま上空へ浮かんでいくようだ。真横に向かせた。鼻が、横顔の輪郭に控えぬ王者のごとく輝いている。肩、胸郭に存在感のある乳頭、臀部が優美で、純白の雪片と饒舌に話し合っている黒い艶が喜び勇んでいる光景を切り取った。次に、白銀を背負った全裸を撮り続け、回れ右をさせて背中から咲子を「傑作が撮れますように」と神に祈願しながらシャッターを切り続けた。

「さあ、フィルムが残すところ二枚になった」

「一緒に撮りたい」咲子は両の手で髪を分け上げると英樹の顔を見て言った。強い意思を表現している瞳を覗いて決意した。英樹は人生を賭けた。「マスコミの晒し者になってもいい。来るなら来い。受けて立つ。真剣勝負だ」と自分の心に念仏を唱えた。

二人の目は鏡の中の瞳を射抜き粘りついた。深い沈黙が雪降る海底へ落ちて行った。目を閉じた咲子のまつげが反って美しい。唇を突き出した。色艶を帯びている顔を見てみると、どんだん口が渴き胸の中で桃の花が一面に咲き始めた。英樹は三年間待ち続けた思いを抱き寄せ、厚ぼったい唇を舐めまわした……。カメラに収まる二つの顔が欠けることなく写るように配置させたが、咲子は唇を離さな

つた。

「咲子、このままの姿勢で動くなよ」と、相撲の「水入り」を真似て足場を定めて、英樹はシャターを押しに離れ、最後の一枚を撮る段取りをした。

咲子はオリンピックで金メダルを獲った瞬間の女子選手のように、英樹に飛び付いた。男は咲子を抱えると、神に捧げる女体を祭壇に置く所作で処女の供物を芝生の上に横たえ、ヴィーナスの丘に口を寄せた。男は口元から飲む音を発せさせ、女は両の肩を暴れさせ、首を震わせ雪の混じった男の頭を両手でかき回している。咲子の体の芯から神秘的な声が洩れてくる。ヴィーナスの丘が反り返る。延々と続く所為に終りが無い。

「……ベアスルーム、ベアスルーム」英樹は奮い立った。咲子の声色は男の魂を溶かし始めた。咲子は同じ言葉を吐き続ける。限界が来た。老人は吠えた。

「イツ クリスマス ホリデイ、サキコ。ギブミ ユア シャンペイン」

鳩の鳴き声がかすかに聞こえる。寒いだろう、と思った。断続的に口に流れてくる咲子を、喜び勇んで飲み干した。

三

咲子の両親が山梨へ引越して行かざるを得なくなった。

の分際で理数系がとにかくできませんの。弟は頭が上がりなくて教えてもらっていますの」

と咲子が報告した。

咲子は予備校の授業料は納めてあるので目一杯勉強するつもりである。三者面談で母親が引越す前に、何とかするから一年だけでも大学に行きなさい、続けられるかどうかはそのとき考えましよう、と、担任も母の言うがまま、と英樹に伝えている。

歳末の大売出しの街の賑わいは控えめで、東横線は普段よりも乗客が少なかった。途中、自由ヶ丘で下車しポリウム満点のフランスの田舎料理店でディナーを二時間掛けて楽しんだ。ロータリーを行き交う人の動きが弾んでいて、笑みが発散している。もうすぐ新しい歳を迎える喜びなのだ、と思った。が、それは英樹自身の心の反映でもあった。オーバーの襟から首に寒気がもぐりこもうとする。駅ビルの一階のケーキ屋でチーズケーキをホールで購入した。シールバスとチョコレートは家から持ってきた。

自由ヶ丘で七時ごろ電車に乗ると元町・中華街駅へ三〇分で着いた。乗り換えなしがありがたかった。ホテルは目の前だ。大晦日の夜に誘われるように公園を歩いた。錨で固定された氷川丸が太平洋に出航したいよと話しかけてくるように思われた。大都会の灯りが港を抱擁している。樹々

母親が言うには方位がいいのだそうだ。村で大型バンとトラックを出してもらい組内の青年三名が上京して一気呵成に家財道具を梱包し、バンの真ん中に父親がベッドに寝たまま母が付き添い、引越して行つた。新年に引きずらないように決断した。甲府に立派な病院があり、母は祖父の農作業、葡萄栽培の手伝いと、新しくワイン醸造に取り組む決心をした。父親は、コンニャクを縦にした歩行が続いているが、大きな祖父の家の八畳間で留守番と療養をすることになった。咲子は前が富士山、後が八ヶ岳の圧倒的な風景の田舎が大好きだと常時よるこんでいる。

「で、ね、日に日に父親の顔が憔悴してきました、危ないでしょう。入院しました。精密検査をすると、悪いところがないんですって。変なの。得体の知れないコンニャクさんになりました。今まで両親と二人が住んでいた2DKのマンションは伽藍堂になり、弟と個別に部屋を持つことになりました。弟の彼女と一緒に勉強しに泊まりに来るようになりまして、私が起床すると、彼女がしっかりした朝食をテーブルに並べて待っている。弟が『生活は朝方にしろよ』だと、生意気に姉のこの私に説教するんです。彼女は制服を着て、それで『お姉さん、おはようございます』だと。彼女、鮭の焼き魚に大根おろし、納豆にネギの刻みを入れ、お漬物、具だくさんのおみおつけ。これがおいしいんです。しっかりしてるわ。恐れ入りました。また、女

の黒い頭が英樹と咲子の頭上を覆っている。潮の香が星を浮かべた海港に淀んでいる。

ホテルの部屋で咲子はすぐに窓辺に張り付いて横浜港の眺望を見詰めている。眼下は歩んできた山下公園の黒い屋根だ。英樹は背後に立つて制服のオーバーを脱がせると、咲子が英樹のオーバーを脱がせクローズットに掛けた。ロングネックの真紅のセーターを着、膝を隠したのこぎりの歯のような裾が波のように揺れている。

「先生！ このホテルには歴史がある。品格、威厳がある。目の中にこの実態を刻んでおきなさいという意味ですね。奥さんと来たの？」

「ううん、咲子が中学生のころかな。彼女とだよ。あたしが煮え切らなかつたから愛想尽かしてイギリスへ行っちゃつた」

「そう……。桜ヶ丘の柔道整復、四谷の名門校、日暮里にある学校の体験入学をしました。桜ヶ丘が好き。先生、お花見できますね。柔道整復より鍼灸のほうがお医者さんが治せない病気を治せてみたい。おじいちゃんおばあちゃんには鍼灸の方が役に立つみたい。鍼灸は奥が深い。母が『授業料はびた一文出せません。父が入院したから、無い袖は振れません』ですって」

英樹はかなり動揺した。姪の学費はまだ目処がついていない。

「そう、お父さんを、試しに鍼灸にお連れしたら。今の医学はすごい。医者と組んで医療に貢献すると、奇跡的な仕事ができる。当たり前、外れがあるみたいだけど」

「父が気がかりなの。で、ね、女優の話を母にしたら乗り気、乗り気の乗りまくり。自分もオペラ歌手になりたかったから。でも、男運の悪い母は、肝心要の時に私がお腹にはいっちゃったんですって。NHKさんに電話して母と面接に行ってきた。『元半分彼』さん、昔の好きな女に会えたから頭に血が上ったでしょう。力入るわよね。NHKとの繋がりがしつかりしている『サミット・アクターズ・オフィス』の社長さんを紹介してくださいました。私と母、元半分さんが同席して社長とオーケラでフレンチ・フルコースをご馳走になってきました。社長の目がテストしてるの。敵さん手が早いでしょ。次の日、カメラテスト。時間に追われて仕事している世界って軽快でいい。テストの結果は、会議で議題に上がり役員全員OKで決まり。公平で気持ちいい。『バスポートあるか』って聞かれて、はい、小学校の時、両親に連れられて韓国へ食事に行ったことがありますって答えたら『演技指導はこれから、まず場数を踏んで』ですって。先生、仕事が入りました。何だと思えます?」

「その他おおせい、エキストラ?」

「はい、当たり前。お正月の芸能人のハワイ滞在レポート。」

「先生、詩がいい、好きになっちゃった。サビは? 曲の頭のボタはどう訳すんですか」

「ね」だ

文芸思潮バックナンバー

- 第1号(創刊号) 2005.1 ¥1000**
銀華文学賞発表
文芸評論家座談会「日本文学の衰退をどうとらえるかー再生は可能かー」
井口時男・富岡幸一郎・菊田均・山崎行太郎
原爆特集「暗闇の中から」桑原千代子／「核の信託」五十嵐勉
- 第2号 WAVE 2005.4 ¥500**
特集・老年と葬儀／五十嵐勉「帰郷者」の栄光と悲劇
- 第3号 2005.5 ¥1000**
ラビンドラナート・タゴール「日本訪問記」
井口時男「現代の犯罪と文学」
五十嵐勉「ノンちゃん、NONGCHAN」
- 第4号 WAVE 2005.7 ¥600**
特集・戦争と記録／下山良行「金剛寺亡命」／斎藤澄子「質問してもいいですか」
- 第5号 2005.8 ¥1000**
特集・戦争と人間
八景正大「イエロークラスター」／河林満「卒塔婆を売る男」
古居みずえ「私が見た抵抗のバレスナナ」
- 第6号 WAVE 2005.9 ¥600**
特集・郷愁／二宮英郷「砂山」／小佐美智子「我が心のギレン」
- 第7号**
第一回文芸思潮エッセイ賞発表 本間美紗子「スヌ」／小浜清志「親方・師匠／中上健次」／五十嵐勉「風の色」／山脇正邦「未遂」／山岸恵一「カス壊疽」／仲間秀典「封印」
- 第8号 WAVE 2005.12 ¥700**
第一回現代詩賞発表／野中美峰「アメリカ詩のマーケット事情」
- 第9号 2006.1 ¥1100**
第二回銀華文学賞発表
文芸評論家&作家座談会「テロと21世紀」
井口時男・山崎行太郎・河林満
八景正大「零度の遊び」
- 第10号 WAVE 2006.3 ¥700**
鈴木英夫「かけおちシンデレラ」／前岡光明「蠟梅の香るとき」
- 第11号 2006.5 ¥1100**
対談「立ち上がる文体」小川国夫・井口時男
特集・飯田章
富岡幸一郎「批評と文学創造」
- 第12号 WAVE**
特集・リストラ／つるみみつる「ギフト」／福田志緒「私の選んだ道」
- 第13号 2006.9 ¥1100**
第二回エッセイ賞発表
特集・同人雑誌からの文芸復興
座談会＝三田村博史・千葉龍・森啓夫・尾関忠雄
インタビュー＝大河内昭爾
- 第14号 WAVE 2006.12 ¥700**
第二回現代詩賞発表／清松吾郎「命の宴」／鈴木みい「航跡」
- 第15号 2006.9 ¥1100**
第三回銀華文学賞発表
座談会＝「暴力的な現在」井口時男・山崎行太郎・小林広一・河林満
原石寛「雪女郎」／中野睦夫「餌食」

クルーにご一緒して、ついでに、飲料水のコマージュを一本。の、脇役。主役はあの有名なタレントさん」

「誰、だれ、だれ」

「先生、案外、ミーハーね。打ち上げパーティーの時、わたしの歌の番が回ってくると思うの。で、ね、母から、引越の前に『アマポーラ』を勉強したの。母に感謝してますの。小さい頃から、フランス料理を食べに連れて行ってくれた意味がやっとなかった。大切な方と気後れせず食事が楽しめた。先生、ジャズ教えて」

「『アマポーラ』? 好きだな。気持ちいい調べだね。メキシコの作曲家ホセ・ラカジェの歌だ」と言って濃紺のダブルのブレザーからリボンで結ばれたプレゼントを咲子に手渡した。

「わあ、ありがとう。開けていいですか」と言って回れ右して横浜港を背負うよう英樹の顔を見た。英樹は胸苦しくなり、微笑みを偽装して照れのがやっとなかった。リボンを解く音が聞こえ包装紙のセロテープを爪で剥がしにかかった。美しい手が動いている。

「わお、デジタル・メトロノーム。振り子型はあるんですが。これはポケットに入る。どこへでも連れて行ける。ありがとう」と言って、肩に両手を投げて抱きついてきた。接吻をしてると、咲子の髪匂いが肺に吸入してきてますます離れられなくなった。英樹は意を決して咲子の鼻の頭にキ

「人生で一度だけなのね、っすか。一期一会はどうでしょう」

「やりますね、その訳かっさ良すぎる。サビは決まっているわけではない。打ち合わせで決めたらその通り歌った方がいい。が、できなかったらごめんさいでいいんだ。JAZZは即興演奏を命とする音楽だ。一番歌い終わった。さあ、ミュージシャンの演奏だ。頭で歌っていて咲子の心がここと訴えるところで仕掛けなさい。堂々と歌いなさい」

「わあ、あたし、何だか楽になった」

「なんでも一生懸命すること。いただいた仕事はギャラが

安くても手抜きは絶対するな。すれば積もり積もって貧乏
つたらしい顔になる」

一時間はあつという間に終了した。

咲子は歩み寄り、真紅のセーターの胸を英樹の顔に押し
付けてきた。腰に英樹は両手を這わせ、セーターを脇の下
まで押し上げると飛び出した乳房を口に含んだ。

「いい、メトロノームはベースなの。ベースが流れを刻み、
曲を取り仕切っているの。だから、ハワイへの飛行機の中
でみっちり練習しなさい。イヤホンはモノラル専用を入
れておいた。本番ではミュージシャンと勝負だ。間違つた
ら、インプロヴィゼーションを仕掛けたつもりで歌って
きなさい。曲をベントして、唸ってはいけません。シナト
ラだって、エラだって間違え、歌いながら修正しようとし
ているのがわかる。失敗を恐れるな。母音にストレスを加
えてスウィングすること。下腹で歌い、咲子の魂に詩の意
味を溶かしてお客さんの顔に飛ばしてやるの。それだけ。

咲子、今日のレッスンドおり咲子の素地をそのまま出しな
さい。たいしたもんだ。まじ上手い。おそらく、母親譲り
なんだろう。ネイティブの中でも際立つこと間違いない」
咲子は英樹の頭を抱えたまま後方のベッドに倒れた。テ
レビは消音にしてある。紅白歌合戦の放映が始まってすぐ
だ。薄暗闇で華麗な衣装の歌い人の口が動き、若き才能が
電気仕掛けのように踊る。歌手が変わるとテレビの前方闇

に複合色が放散されチカチカ色が変わりステージに火花が
こぼれる。咲子の乳房をしゃぶっている、睡魔が襲って
きた。寝ることに集中した。疲れを抜くのが男の責務だ。
体力をみなぎらせる、と自らに命令した。

どのくらい眠ったのだろう。夢だ。横浜港で停泊する小
型帆走船から呼んでいる人物が現れた。昔の女だった。プ
ロのサッカーチームと契約した息子の住むイギリスへ、息
子の身の回り、マネージャーをしている夫の下へ旅立った
バイオリニストだった。

「やつと、奥さんと別れられたのね。愚図男。駄目男ちゃん。
あなたは結婚向きの男じゃない。おバカさんのバガボンド
だから。アルゼンチンは暮しいわよ。どこか外国で野垂
れ死んだらいい。たつた一度の人生よ。やりたいことをや
んなさいよ。遅いけどね」英樹が女に呼びかけると、逃げ
るように消えて行った。

呼び声は咲子からだった。全裸だった。テーブルの上の
ケーキのキャンドルから炎が立ち上っている。「もうすぐ
カウントダウンですよ」と言うのと両頬を両手で暖かく包ん
でくれた。されるがまま腰に手を回して抱き締め、鼻先で
臍のくぼみを撫ぜ回し、豊かな巻き毛を愛撫していると口
の中に咲子が飛び込んできて、たつぷり液の中で泳がせた。
咲子はベッドに這い上がり、英樹の胸に座して両腿で英樹
の顔を締め付けた。咲子は消音テレビの実況放送を始めた。

歌合戦は終わったようだ。除夜の鐘が衝かれていく。腰をく
ねらせている。咲子の股間の肉壁に圧迫され、咲子の両掌
が背後に反り、英樹の体を撫ぜ回し皮膚の隙間からかすれ
る音が生まれて来る。英樹は実況の乱調な声以外何も見え
なかった。

「さあ、先生、カウントダウンが始まりましたよ。 ten
nine eight seven six five four three two one」

瞬時、横浜港の海原から船、船の吠える声が交響の渦に
なり、男と女の肉の営みに絡みついてきた。咲子の腰はう
ねりくねる。潮風が囁くようにすすり泣き、鼻腔から突風
が吹き上げ破裂音を発し、口腔から快楽の讃辞の声が唸り
出している。

咲子は停止した。英樹の喉仏が勢いをつけて熱くなった。
温かいシャンペーンが流れて来て、胃の辺りで消えた……。
咲子は頭を並べて、握って引き寄せ自分の物にしようとし
ている。英樹は咲子の背中に両手を滑りこませ撫ぜ回し、
腰を動かし咲子の巻き毛にあてがった。

「先生、私のこと好きじゃないじゃない」

「何を寝ぼけたこと言ってるんだ。咲子には地獄の底まで
付いて行くぞ。咲子を知れば知るほど愛が濃厚になってい
く……。『あなたの体は結婚するまで私の体だからね。自
分の体、傷つけたら許さないからね』この間のお母さんの
言葉を思い出した。そうしたら『お父さん、咲子さんのお

母さんを裏切ったらいけないよ』って息子が一人前に言う
の。で、ね、息子のやつおとなしくなっちゃった」
「先生、子供いない、って言ったじゃない」
「ムスコって、ジュニアだよ。咲子が逆上がりできた鉄棒
君だよ」

咲子は腹の底から笑い、治まると部屋は深閑となった。
二人から同時に新年の祝詞の言葉が出た。そして、咲子は
宣言するように「今日は元日、午後五時、成田空港集合。
同日元旦、朝、ハワイに到着。行ってきます」

「試練を乗り越えて行くんですよ。辛い時はアンパン食べ
て、『アマポーラ』を歌うんですよ」

「あたし大好き。おまじない？」

「そう。アンコは日本。パンは外国。あなたは日本と外国
の融合の仕事、女優になったんですよ。アンパンのつぶつ
ぶはね、アマポーラの種なの」

「ありがとう、先生」

英樹は咲子の体を自らの裸身に抱き上げ両手が届く咲子
の体を慈しんだ。

四

毎年、元日には、必ずカリフォルニアはオックスナード
に暮らす、サトム・高山から年頭の挨拶の電話が入る。今

年は留守していたので、すぐに掛けなおした。姪の大学院の学費を何ででも捻出しなければならぬ。日本でローンを払い生活をしている限りでは絶対に不可能である。自室を貸して、余剰金を学費に当てる計画を思いついた。すると、加速をつけてアメリカで暮らすことへと心が決まった。英樹の年金は十万。一か月千ドルで暮らす。簡素な生活と、ただ一点「時間」が欲しい。アパート代が二百ドルまでの場所を見つけてくれるように依頼した。屋根裏でもOK、テレビを購入し、「タイム」を読むと知らない単語が出てくるので英語力を完璧にする、パソコンを繋げて仕事をする、三食を作ることはこれまで三〇年自分でやってきたから何の苦もないことを念押しした。足の便は長距離向け「ラージ・ホイール・フォールディングバイク」を愛用している。キャリニングバッグに収め、目的地まで交通機関を使って行き、現地でもの〇秒で組み立てどこへでも取材に走り回れる。サトムは人の面倒を見るのが趣味の男だ。娘がオックスナードで三本の指に入る農場を営み、四代続く日系人一族の次男と結婚した。海を眺める農場に、メキシコ人の職長用簡易家屋が空いているから聞いてみるといい、自分のビジネスでは「アメリカンは、ベジタブル・サラダにネギ入れて食べるかの。ビジーよ」と、オリエンタル・ベジタブル・グロウーとして出荷で全米一になったことを話し始めた。

も車が少ない。部屋にいといたたまれなくなり裏の氷川神社の境内に足を運び、林立するブナの大木の元で腰を下ろした。薄緑がかった天に抜ける木肌が心を落ち着かせてくれる。石畳を歩く初詣の人の流れを感じ、土手の隅の窪みで日影に守られた残り雪が、しぶとく土に混じって頭をもたげている。目を瞑り咲子の「握手」を思い出し、オーバーから手を差し込み始めた。

明日が学校だという日の夜に咲子はやってきた。日に焼けた喜びの顔を見せ、弾ける言葉を発しながらチョコレートの土産を持って布団に飛び込んだ。

「ごめんなさい。どうしても山梨の母の所へ行かなければならなかったの。ハワイの報告と、大学の話で。結論を出したの。四年後になるか五年後になるか、絶対、ニューヨーク大学に行くって。自分でお金を稼いで自分の力でいきたい。その前に日本で三年間鍼灸専門学校に行く。国家試験に合格することを家族会議で話したの。おじちゃんとおばちゃんがじっと聞いてたの。母は、大学へ行きなさいの一辺倒。弟は能天気。」

今日の午後、富士急バスの乗り場へ祖父が運転して祖母と一緒に送ってくれた。弟は一日遅れ。祖父、とっぴいでしよう。ベンツに乗ってますの。C200だけ。祖母が風呂敷包みを手渡して『バスの中で弁当食べなさい。咲子……おじいちゃんとおばちゃんのお年玉がはいっている

次の日、偶然にエレベーターで顔見知りの同じマンションに住む不動産屋の社長と出会った。新年の挨拶をした後で「あたしの部屋いくらで貸せるか」と聞いてみた。「602号室だから一度見に来てください」と尋ねると小柄な社長は「今からではいけませんか、これから鎌倉へ初詣に行くので、その前にいかがでしょう」と返してきた。

英樹がコーヒーを淹れる間、社長は無言で部屋の下調べをして、懐中時計かと思った磁石を取り出し「東京タワーが真東。毎日お天道さまの恩恵を受けて暮らす住民は幸福になります。騒音が全然ない、畳、キッチンの換気扇、洗面台と、便器をウォッシュアップに新しくすれば、場所はピカ一だし十七万は堅いでしょう」

胸算用では、ローンを十万払って、六万を姪っ子の大学院の学費に回せる。一万はまさかの時に蓄えておく。両親を見てきた妹に孝行をすべきである。アメリカ滞在中、マシヨンの管理を託さなければならぬ。それと妹の住所を、日本の連絡先にすれば時間が取られることも多くなる。社長に「その節はよろしくお願いします」とお礼を述べた。

咲子が帰ってくる日を鳩とカラスに問いかけていたが、カラスが顔を見せなくなった。帰っているはずなのに咲子は来なかった。メールの着信がない。病気かな、と心配すればするほど落ち着かなくなった。正月三箇日は明治通り

かんね……」祖父は何も言わないの。微笑んでいるだけ。発車してすぐ、おせち料理の弁当を開けたの。驚いた。銀行の厚み一センチの封筒が二つあるの。それぞれ、おじいちゃんより、おばあちゃんよりって書いてあるの。中を見たら一万円札が百枚ずつ。あたし、声を出して泣いちゃった」

一枚一枚服を脱がせ現れた肌を唇でなぞっていた。咲子は唇を寄せてきた。英樹は耳の穴に舌先を突き刺し、美しい鼻を口の中でしゃぶり始めた。両乳頭は、掌に合わせ若い力を返してきた。臍の、その下の横一線に素肌との境界があった。男が執着している白いデルタの肌で、鼻先でくすぐると潮風の匂いが強くなった。チョコレートを味わいながら、一週間会えなくて情緒不安定になりかかっていた精神に力を注入した。息を乱して咲子は話し続けた。

呂律がおかしくなった。「先生、ありがたう。私の仕事はサーフボードを右手に抱えて、浜辺を歩く撮影だったの。私の英語、完璧に通じた。相手の言っていることが全部分った。暗唱している文章が頭に浮かび、どこからでもいらっしやいって感じ。あんなに話せるとは思わなかった。先生の音声学はすごい。話題を変え、JUST IN CASE が MAY I BUT IN とかを挟んでハワイのプロダクションとのビジネスを通訳してきました。難しい単語が出てくるわけだし、相手の言っ

いることが遂一わかるので、それを拾って話を進めました。先生の言うとおりにしたの。先生が『英語は暗記、貯金がなかったら、お金引き出せない』——の意味がやっとなかった。私、絶対、ニューヨーク大学へ行く。私は子供の頃から、夏、冬、春休みを、前は富士山、後は八ヶ岳を見て過ごしたの。ハワイには何にもない。ゆっくり風が流れていて飽きちゃう。海は日本の海も荒れる。ホテルはやたらピカピカしてるだけ。横浜の方がはるかにいい。一週間が限界、なるほど先生が『ハワイからノーベル賞受賞者は出ない』と言った意味がわかった」

咲子の唇を離して英樹は内腿を舐め回し、脹脛かぶろはきから足の指を一本一本口に含んだ。一週間ぶりに「シャンペーン」と、声を出して英樹は咲子を焚き付けた。

「先生、ありがとう。『フォア ワンス イン マイ ライフ』ビッグバンドで歌っちゃいました。終ったら、拍手、拍手の大喝采。自信ついた。同席の俳優さんたち、スタッフさんに悪いことをしたな、と思っちゃった、で、ね、ハワイのプロダクションのディレクターが本格的にジャズをやってみないかって。褒め過ぎでしょう。でも、あの人はちびジネスにならない話をしないから……ビバリーヒルズの先生を紹介するって。それでね。大学へ行くか、鍼灸に行くか、迷える子羊です、と答えたの。心では、鍼灸の資格を取って、収入を確保すること、女優でパンが食べべら

ニューヨークで暮らしている三年後の自分のイメージが流れていたそうだ。

「父親の病気は原因不明で西洋医学では判明できない。が、院長先生が『はしかに高齢で罹った人には菌が死なないで生きている場合があり、後で悪さをすることがある。お父さんは中学三年の時、はしかになったから恐らく……鍼灸で診てもらったら』とおっしゃったんですって。そして、施術してもらったら嘘のようになりましたの。だから鍼灸を極めて行く勇気が強くなりました」と咲子は喜びを報告した。でも、友だちが大学生になって、動揺もある、と加えた。即座に英樹は「江戸時代には西洋医学は入ってなかった。あの時代数々の難病を治していたはず」と咲子に伝えた。

英樹の渡米が決まり、別れが二日後に迫った。

咲子は休みになったら鍼灸の教科書を持って、JAZZの勉強に行くから英樹のところへ滞在すると宣言した。別れの寂しさは皆無だ。咲子とお花見に出かけた。英樹が毎年行ってきた行事だ。四谷駅で下車。足が喜んでいる。英国大使館、千鳥が淵へ人々の川に流され、花びらが舞いつつ短い旅を終えて湖面一面に咲き誇る。光を反射させている光景に魅了され、英樹は日本に生まれて良かったと思っ

た。流れにまかせ靖国神社でお参りする。続いて咲子と武道

れても、私の体に一本筋を通しておきたいって、答えようとしたが口に出さなかったの、喋ると運が逃げるような気がしたの」

「ジャズは咲子が演技、施術に行き詰った時、必ず助けてくれるよ。急ぐことはない、中断しないで一生涯付き合っ

て行きなさい。大喝采だったことは、あなたの母親がオペラ歌手になりたかった執念が、ジャズに化けて娘に遺伝したんですよ。それから、先輩を立てるんですよ。目の下のたんこぶになつたらだめですよ」

英樹は咲子に諭すように言った。咲子はさっぱりした顔を見せて、人間の体の仕組み、どのように五体が臓器が人間を生かしているのかの神秘を勉強したいと語った。肉体の機能と精神の力がどのように助け合うのかに関心を示し、女優だけ一本に絞ってちゃんぽんと浮わつくことは嫌いだと言及した。

咲子は卒業した。サクラが咲いた。桜ヶ丘鍼灸専門学校へ入学金を納入しようとした時、校長と進路指導主任の推薦のおかげで、成績がトップ3以内、出席率100パーセント、面接官との相性がよく、特殊能力の枠があり、コマ一シャルに出ていることを総合して特待生奨励制度で入金と後期授業料が免除になった。三年間授業料が半額に免除され咲子は興奮していた。入学式に出席している間中、

館前を通り、北の丸公園を抜け江戸城跡へ足を向け、北枯橋で佇んだ。咲子は橋の上からお堀に目を落とし「なんて美しいのでしょう」と欄干に手を預けたまま言った。

かつて江戸の火事で燃え上がり天守閣を失った石垣は、しぶとく日本人が築城した職人の腕の見事さを今に伝えている。石垣上の見晴台でベンチに座り、二人はトマトジュースを飲んだ。皇居から長閑のじかに盛り上がる日本の威厳と品格の形象が、無言で歴史に対峙し責任を持ち、春の日に堂々と競演していた。

咲子は四方八方に点在する花々の満開を乗せ、撫ぜにくる風を受けながら目を瞑って喜びの顔を見せていた。日本人と外国人が半々だった。外国からの旅人は無言で風景を見詰めていた。

それから、上野へ回って西洋美術館へ入場した。目の底に桜の乱舞が、人々の花を愛でる宴うたげのざわめきが耳の底に残っていた。英樹はポール・ゴーギャンの「セーヌ河・パッシーの対岸から」の前でしばし固まった。ゴーギャンがゴッホとの交友以前の心の澄んでいた時代、一八七六年の作品だ。晩年この画家は妻子を捨ててタヒチへ旅立った。

「咲子、この絵の持ち主に明日、招待されているんだ。行こう」と、咲子に肩を寄せた。

アメリカ時代に知遇を得た。国境の街、ティファナで貿易会社を二〇年以上経営し、その後、故郷熱海に帰りビジ

ネスを展開している森脇家へレンタカーで出向いた。途中、海の眺望が広がると、写真を収めた簡易アルバムを二冊手渡した。咲子は一枚一枚を気が済むまで検査して話しはじめた。時々顔を太平洋に向けて、また、写真に食い入った。板橋のカメラマンと暗室で共に現像したものだ。絶対外に洩れることはない。英樹は「咲子がいつの日にか、今だと思ったときに出版しなさい」と言った。

「先生、同じもの二枚あるからこれあげる」

それは窓を開けた空一色に雪が舞い、ヴィーナスの丘に英樹の舌が愛の意思を強めている様相を露呈させている。咲子は喉を反らせ、背を反らせ、口を開け、目を開き、両手を垂らし、男の唇に愛でられている黒い艶毛は、その悦楽の意思を自らの臀部に報告して、臀部は応じて、シエイクさせているように見える。だが、英樹は自分の写る顔を見て、降りしきる雪が、静止している咲子の体軀を躍らせているように感じた。

「ひとは疑いの動物だよ。歳月が人を卑しくも上品にもする。生活に困ってあたしが病気になるって、これを雑誌社に売り込むこともあるかも知れない。赤ちゃんが三日の命だと宣言され、手術で命を貰えるなら母はからだを売って費用を工面する。母親の本能だ。それが生きるという意味だ。崇高だろう。自分で持ってなさい。あたしはね、あの初島から熱海港まで十二キロ遠泳競技大会で十二回完泳入賞し

たの。テレビ番組でタレントさんに指導しながら一回泳いだから十三回だ」

咲子は「信じられない」と連呼したが、咲子が小学生のとき一日一〇〇メートルは泳がせられたことを引き合いに出して「十二キロは一〇〇メートルが十二回だよ。海だから蛇行するから十三回かな。だから、咲子だって泳げるんだよ」と説明すると、咲子は深く頷いた。「疲れが極限にきて『本当に死ぬ』と思うの。一方で『どんなことがあっても死んじやだめだよ』って、海が励ましてくれる。でも恐怖に負け、死を選ぶ。薬になりたいから。気を失ってるの。だが、練習で鍛えたからだは動いている。その時、恍惚と忘我がはじまり、例えようもなく気持ちよくなるの。快楽が静かに体中で爆発するの。海は羊水だ。羊水を飲むと力が出るんだ」

明日から咲子の海の恵みは飲めなくなる。

森脇邸は画廊商のごとく壁に絵が飾ってある。大きなガラスドア全面を通して遠く海洋に島々が長閑で淡い藍色の海原に霞んでいる。ハーブ茶をすすりながら「オランダであの絵を画廊から説明を受けている時、『欲しい』って女房が動かないんだ。僕も、覚悟を決めた。贋作でもない。たった一度の人生だ、女房への感謝の気持ちだと、腹をくくった。買って本当に良かった。その後だ……」と左手を

て、吹きすさぶ潮風の匂いを慈しんだ。

右手で揉みながら話を続けた。仕事が好きで、バッファ・カリフォルニアの海洋で獲れる海産物を、全米の寿司屋に卸して財を成し、仕事を道楽として人生を送ってきた森脇氏は突然、倒れた。

「脑梗塞はカーナビと同じで左へ左へと行きたがる。水を飲みなさいよ。……あれえ、このお嬢さん。コマージュルに出ている女優さんに似てるね。MRIは年に一度撮りなさいよ」と繰り返した。咲子がやにやにしていると、ベルが鳴った。日曜なのに森脇氏の社員が訪ねてきた。同僚と共同で所有するセイリング・ボートを貸してくれる算段になっていた。今夜の食事を VILLA DEL SOL で一緒にとることを確約して、彼らの車の後に付いていった。サンビーチに隣接している熱海港にヨットが停泊している。奇しくもそこは遠泳で死に物狂いで帰って来るゴールの隣であった。熱いものがこみ上げてきた。

春の海は静穏だ。熱海の街並を、伊豆半島を抱く新芽青葉群の光景にサクラが点描し、稜線に輪郭を固められ、風が薄緑に染まっている。咲子は帆を背に優雅な顔を天に向けて暖かい日を呼吸している。英樹が背後に立つと咲子は英樹の左手を乳房に誘導した。右手で咲子のジッパーを下ろし愛でながら咲子の髪が風に踊って顔に触れると、高揚し目を瞑った。この海原で死闘を繰り返した想い出を乗せ

から永遠に別れるみたい」と、咲子は日焼けした喉を伸ばして右舷後方から吹く風を受け、髪を泳がせ天に向かって目を瞑り言った。耳に口を寄せて「小型船舶免許を持っているから、岸から一〇キロまでは帆走できるよ」と囁いた。英樹は無性に泳ぎたくなった。帆を開放して停止し、全裸になった。ゴーグルを付けて船外機脇のステップに足を乗せゆっくり体を海原に沈めた。キールが異様に大きく長く目の前に存在し、魚群が逃げて行くのがわかった。

陸では必要ない。だが、海中では自信がない、と自認し、手を口によせ力の付く錠剤を飲んだ。顔を出し口から海水を噴水のように飛ばすと「気持ちいい。冷たくない。海は初夏を伝えている」と報告した。呼吸が右オーブんだから、ヨットを中心にして右旋回で泳ぎ始めた。小魚を追い回した。手を上げ咲子の顔を見ると手を振り返す。三〇歳の時から、三〇年掛けて死闘を繰り返した海原への感謝の気持ちと惜別の情が交じり合ってきた。毎年八月四日に泳いだ日々を腕が覚えている。ひと掻きひと掻き、ゆっくり速泳の日々を思い出し旋回した。最後に完泳したのは六〇歳の時、六年前だ。立ち泳ぎをする。

「先生、私も泳ぐ」といつて飛び込もうとした。コマージュルと同じ金色の水着を付け咲子が船尾に立っている。

「止める、やるんだったら浮きと一緒にロープを腰に巻いて、心臓を冷やしてからにしろ。何が起こるかわからないぞ」

「先生といると、何が来ても、ゼーんぜん、恐ろしくない」と叫び返した。

船尾の取っ手を左手で捕まえて待っていると、咲子の肉体が胸の中に降りてきた。英樹はオレンジ色のゴーグルのレンズを磨き目に付けた。英樹は咲子を抱き締め海中に沈んで行った。ゴーグルとゴーグルを当てて目を見合った。

腰にはロープが結わかれていた。上から脱がせ、下も脱がせロープに縛った。目の前で揺れている咲子の巻き毛に唇を寄せ、両肩に両脚を背負った。息苦しくなり、二つの顔が浮上した。目線上、遙か遠くに水平線を溶かしている光の乱反射が見えた。熱海と伊豆半島の景観は、ヨットの反対側で見ることはできない。咲子は英樹の首に両腕を回し唇に吸い付き、液を送ってきた。

英樹は離れて潜り、両手で頭越しに船縁を掴んでヨットの腹に背を向け、ぶら下がっている海中の咲子の裸体に見とれていた。日に焼けた肌が波の光に揺れている。頭を出した。咲子が英樹の肩に両手を回し、英樹の肉体にキスしながら海底に下がっていく。英樹は面を浸けると咲子が動き出した生き物を口で愛撫しているのが見えた。海中の光が頭髪に投射して揺らめき、咲子の肉体に光の陰陽を映し

ている。

二人は海面に顔を出し春の海を賞讃している。咲子は逆上がりを試みる。両脚を英樹の臀部に回し足首を組んだ。「覚悟はいいな」太い声で言った。英樹は咲子の目を射抜いた。腹に力を入れて「行くぞ」と張り上げた。同時に掴んでいる両掌の臀部を引き寄せた。咲子は摩訶不思議な声を発し両腕を首に回して強く抱きついてきた。……波が二人を揺らしていた。英樹はロープを解き咲子の腰周辺から自分の臀部に二重に回して縛りつけた。しばらく動かなかった。やがて咲子が絡めている両脚に力を入れ英樹の臀部をかかとで打ち始めた。英樹は取っ手から手を放した。結ばれた二人のからだは海中に沈んで行った。見上げるすぐ頭上で夕焼けが円陣に広がり、天蓋から火の粉が海底に落下して空を切っていた。男と女は呼吸を限りなく耐える。浮き上がり呼吸を整え、再度、海中遊泳に旅立った。

顔を海原に出した。英樹は咲子の耳をくわえ短刀直入に快楽の喜びの言葉を吐き続けた。咲子は呼応し英樹の性愛の儀式の言葉を讃歌し頭を揺らし英樹の舌をしゃぶりながら女の喜びの声を響かせていた。

「ヨットって不思議ね。先生。逆風に向かって走れるのね」

英樹は「カミング アバウト！」（風上に向かって行う

方向変換）と大きく叫んだ。

春風を交互に帆の左舷と右舷の前方で受け、右へ左へ舵を取り母港へ帆走して行った。



二宮英郷

にのみや えいごう

1942年 栃木県生まれ
 青山学院大学院法学研究科博士前期課程修了
 同大学院MBAコースで学ぶ
 社団法人 国際農業者交流協会 米国派遣 = 3年制
 カリフォルニア農業研修生修了
 駐日メキシコ大使館 領事部 勤務
 同メキシコ総領事館(セクレタリー・ジェネラル)
 現在、青山アカデミー英語塾 主宰

小説の書き方

作家を志す人々のために

五十嵐 勉

個人の内部にある思いや認識のエネルギーを、どのようにして多くの人々が共感できる普遍的な姿形にするかという作業が「書く」ということです。

「書く」という大きなエネルギーをお持ちの方々に、この本が少しでもお役に立てれば幸いです。(前書より)

素材の見つけ方・選び方/モチーフについて/テーマの捉え方/ストーリーの組み立て・構成/人物の設定/文章についてなど

自家版限定本 800円

ご注文・お問合せは直接文芸思潮までご連絡ください

Tel 03-5706-7847 mail: asiawave@qk9.so-net.ne.jp

受賞の言葉

二宮英郷

編集長から「優秀賞に決まりました。おめでとうございます。何回目ですか」

「四回目です。『砂山』・奨励賞、『インディアン・サマー』・優秀賞、第三回、第四回は休み。第五回が『JAZZ』・奨励賞、それから今回です。ありがとうございます」

「たいしたもんです」

この言葉は、時間の経過とともに心の中で動き出した。私は勉強不足で、整理整頓が不得意だ。だから、休みに神田へ出向き、活字の大きい日本・世界の「短編全集」「文学全集」を見つける探検に出なければならぬ。散らかっている天才の英知を読破しなければならぬ——三日坊主であることは百も承知。三日坊主が四日坊主になり、間断時間が若干とも縮小すればいい。その気になった時、手の届くところに「ある」ことが肝心だ。

一方、六十七年生きてきて、偶然耳にした音楽に「なんて、いい曲だ」とうなり、圧倒された。この曲の作曲家はいつた誰で、この人物の頭の中はどうなっているのだ、

と、かねがね頭に引っかかっていることの勉強もしたいと思いつつその術がわからないでいる。

聴く以外にないのだろう。最近も、この曲がショパンの「革命」だったのか、よくぞこのようなすごい曲を作曲するものだと感銘した。できる範囲でコレクションを始めようとキモに銘じた次第である。活字と曲の合わせ鏡はどう展開するか、面白そうだ。

徐々に今年の幕が下りようとしている。クリスマスの調べを口ずさみ、帰路、人の流れにまかせ店頭のデコレーションを楽しむひとは、何かいいことが起こる予感を抱かせる。帰宅し、ポストを開けると大切な方の、またご家族の喪中の葉書が舞い込んでいることがある。絶句してお祈りをしてしていると、その方が微笑を返してしばし話し合う。

頑張らなくていい、目の玉黒いうちはこつこつと勉強していきましょう。